Catalog 19-#5

www.tambourine-japan.com
email: song@tambourine-japan.com

ご注文の際、プライス・コードもご記入下さい。
プライス･コード{ａ￥１６９０/Ａ￥１８９０/Ｂ￥２０９０/Ｃ￥２２５０/Ｄ￥２４９０}
（表示価格は税抜き）　別途消費税が加算されます

（送料）
※ご注文枚数に関係なく《一律２５０円》郵送
ただしＬＰを含む場合は一律５００円。
※代金引換送料（郵送）：初回 390 円/二回目以降 590 円何枚でも）
ＬＰを含む場合は＋２５０円。

注文方法サイト：　http://www.oct-net.ne.jp/tambouri/order.htm

【ご注文はできるだけ１０/５までにお願いします】
注文方法１の場合を除き、発送はご注文受取り後約５日以内にしたいと思っていますが、無理な場合もあります。締切日に近いご注文の場合は、２週間ほどかかる場合もあります。電話注文はお受けしておりません。
●お問合せはメールにてお願いします。
●ご注文の際、プライス又はプライス･コードをお書き願います。
●カタログは郵便にてお届けします。

（厳選カタログ）
*前々々回は Sian James と Julie July Band、前々回は Dervish と Bill Jones そして前回は Luke Plump & Kate Burke と Gatehouse のそれぞれの新譜がトップセラーの１位と２位になりましたが、最近はトップセラーの１位と２位がダントツで注文が寄せられる傾向があります。おそらく多くの方が厳選して注文をされるようになったからかと思います。二枚とも「良かった！」の感想をメールや振替用紙の通信欄で頂きましたが、その二枚と負けないくらい好評だったのが Pete Coe, Brian Peters & Laura Smyth の"The Road To Peterloo"でした。特に古くからの常連さんに好まれているようでした。今回はさて、どのＣＤがトップセラーの１位と２位になるやら。
*消費税率変更に伴い、当店では１０月６日受付分より１０%課税となります。

（分割払い）
*分割払いをご希望の方はお申し出下さい。最初のお支払いは請求額の半額になります。残り半額は 11 月 10 日まででＯＫです。

＊TOP　30　SELLERS(19－#4)＊
1)LUKE PLUMB & KATE BURKE
　:Luke Plump & Kate Burke(Australia)
2)GATEHOUSE:Down The Moor(Ireland)
3)DICK GAUGHAN:The Harvest Tapes(Scotland)
4)GRAINNE & BRENDAN:Songs From Ireland(Ireland)

5)EDGELARKS:Feather(UK)
6)THOM ASHWORTH:Head Canon(England)
7)KELLY HUNT:Even The Sparrow(USA)
8)JULIE JULY BAND:Lady Of The First Light(England)
9)NANCY KERR & JAMES FAGAN
:An Evening with Nancy Kerr & James Fagan(England)
10)BEN WALKER:Echo(England)
11)TONY McMANUS & JULIA TOASPERN
:Live In Concert(Scotland,Germany)
12)COE,PETERS & SMYTH:The Road To Peterloo(England)
13)KEVIN CRAWFORD,COLIN FARRELL & PATRICK DOOCEY
:Music And Mischief(Ireland)
14)J.J.CALE:Stay Around(USA)
15TRIAKEL:Handelser I Nord(Sweden)
16)DIANE NI CHANAINN:Idir Muir Agus Sliabh(Ireland)
17)TREASA NI MHIOLLAIN:Lan Mara(Ireland)
18)DONOVAN:Bottom Line 1976(UK)
19)THE SMALL GLORIES:Assiniboine & The Red(USA)
20)GENE CLARK & FRIENDS:Live At The Three T's(USA)
21)BUDDY & JULIE MILLER
:Breakdown On 20th Ave. South(USA)
22)ODETTE MICHELL:The Wildest Rose(UK)
23)THE DOVETAIL TRIO:Bold Champions(England)
24)GAIZCA PROJECT:Gaizca Project(Spain)
25)ANNA TIVEL:The Question(USA)
26)JEB LOY NICHOLS:June Is Short,July Is Long(USA)
27)KAREN MARSHALSAY:The Road To Kennacraig(Scotland)
28)PAPER WINGS:Clementine(USA)
29)NIGEL RICHARD:Not Before Time(Scotland)
39)RONNIE LANE:Just For A Moment (Music 1973-1997)(UK)

Guitar, Re-issue, USA, Canada, British Folk, England, Scotland,

Ireland, USA(Trad), Europe ほか, NEW ARRIVAL, あとがき

（ジャケ写掲載分が初入荷と初コメント商品です）

［ＢＯＯＫ］

*堀田はりい:東遊伝～鷹王と八百万の神々　　税込み¥2200
（大長編歴史ファンタジー小説。「ケルトからモンゴル、三国時代の韓半島、そして筑紫国へと、遙かなる草原の道を辿る精神の旅。ケルトの竪琴から巫楽に龍神を招来する歌舞音曲。"金"という永遠の命が繋ぐ神々との交流。力士の持つ邪破の力を縦糸に、ニール・ヤングやジョン・レノンまで現れる言霊の世界。世界の音楽好きには堪られない、これぞ東遊伝。星川京児=音楽プロデューサー。NHK「にっぽん、心の仏像」他=。2012 年梓書院刊）
*堀田はりい
:神宿る沖ノ島―古代日本人が見えてくる　　税込み¥1800
（沖ノ島祭祀遺跡の謎が解き明かされた究極の一冊がここに完成！

右文書院ＨＰより。2018 年右文書院刊）
*堀田はりい
:古代天皇誕生記―こうして天皇の国は生まれた　¥1800
（126 代続く古代天皇の謎に迫る 1 冊。祭祀から読み解く古代日本の正しい歴史を知り、卑弥呼や邪馬台国を知ろう!右文書院ＨＰより。2019 年右文書院刊）

[CD/ＪＡＰＡＮ{Celtic,Harp}]
*AGATA:Pray　¥1905
（Ceis のｼﾝｶﾞｰでﾊｰﾌﾟ奏者の AGATA のﾊｰﾌﾟの弾き語り。AGATA が演出をし、主人公を演じている演劇"Pandora"の自作の主題歌とその他 AGATA が演劇でうたっている自作の挿入歌数曲とｱｲﾘｯｼｭ･ﾄﾗｯﾄﾞの"Foggy Dew"の計 7 曲収録。演劇は壮大なﾌｧﾝﾀｼﾞｰで、AGATA のﾊｰﾌﾟの弾き語りは、空想物語{真夏の夜の夢？}の世界へと誘う。2013 作。Sound Office UZU）
*Ceis:Wandering Aengus　税込み¥2500
（Ceis{ケーシュ}～生山早弥香{アイリッシュ・ハープ} & AGATA {ヴォーカル、ケルティック・ハープ}～
「生山早弥香はハープ演奏に曲の魂をとらえつつ、スコットランドやアイルランドの音楽に心酔してきた。今、彼女はこれらの伝承曲の中から偉大な歌に注目する。それらの歌を日本語に替え、ケーシュは新たな聴き手と、より深き味わいを求める聴き手に向けて、信じられないほど見事な曲をくり広げている」イギリスの音楽雑誌「TheLiving Tradition」の前編集長ピート・ヘイウッド）
2013 作。ﾀﾑﾎﾞﾘﾝ）
※本 CD のみご購入の方はご注文分の送料が無料になります。
*生山早弥香:Light （2011 作。ﾀﾑﾎﾞﾘﾝ）　税込み¥2500
「「Light」を聴けば、アイリッシュ・ミュージックとスコティッシュ・ミュージックの技と型に精通した音楽家であることがはっきりとわかる。魅惑の精妙さと、演奏法の、いくつかの歓喜の展開が彼女の演奏に宿っていて、壮麗な気分を経験させる」
（イギリスの音楽雑誌「fROOTS」の 2012 年 6 月号）
※本 CD のみご購入の方はご注文分の送料が無料になります。

[DVD/ＧＵＩＴＡＲ]
※国内製 DVDﾌﾟﾚｰﾔｰで再生可能
*MICHAEL MESSER:Guitar Maestros Series 1　D
（ｽﾗｲﾄﾞ･ﾌﾞﾙｰｽ･ｷﾞﾀｰ奏者 M.Messer のｷﾞﾀｰ弾き語りﾗｲﾌﾞ映像。"Main Featue"は Trevor Dann を話し相手に"Can't Be Satisfied"や"Walking Blues"など８曲を奏法に焦点を当てて演唱。"Additonal Track"は完全ﾗｲﾌﾞで"Rolling&Tumbling"や"The Lone Wolf"など７曲を演唱。約 95 分。2006 作。Sound Technics）
*STEVE TILSTON:Guitar Maestros Series 1　D
（S.Tilston のｷﾞﾀｰ弾き語りﾗｲﾌﾞ映像。鮮やかなﾌﾗｯﾄﾋﾟｯｷﾝｸﾞ･ｷﾞﾀｰの伴奏による弾き語り"Here Comes The Nights"から SSW の Steve の弾き語りの世界に吸い込まれる。"Main Featue の８曲、"Additional Track"の８曲の計 16 曲のﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽが拝める。2006 作。Sound Technics）
*GORDON GILTRAP:Guitar Maestros Series 1　D
（美麗ｱｺｰｽﾃｨｯｸ･ｷﾞﾀｰの G.Giltrap。"Main Feature"では 8 曲をｲﾝﾀﾋﾞ

ューを挟みながら、Gordon の音楽の歩みを辿るようにｱｺｰｽﾃｨｯｸ･ｷﾞﾀｰとﾀﾞﾌﾞﾙ･ｱｺｰｽﾃｨｯｸ･ｷﾞﾀｰを神業的名演奏を披露する。"Additional Track"には神業的名演奏が 9 曲{こんな美しい"Here Comes The Sun"は聴いたことがない!}収録。加えてｴﾚｷ･ｷﾞﾀｰ演奏のﾜｰｸｼｮｯﾌﾟのおまけ付き。ｷﾞﾀｰ･ﾌｧﾝ極楽保証。片面 NTSC でもう片面が PAL。2006 作。Sound Technics)

[CD/GUITAR 他]

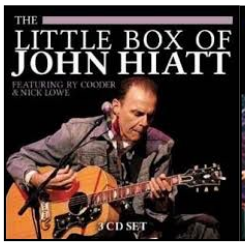
*TONY McMANUS & JULIA TOASPERN:Live In Concert　　A
(ケルティック･ギター名手の Tony McManus とドイツ人女性ギター＆ヴァイオリン奏者の Julia Toaspern による本ライヴ･アルバムは、なんとまあゴージャスなギター音楽＋α。ギター･デュエットによるアイリッシュで気持ち良く幕開けする本作は、アイリッシュ、スコティッシュ、ケープブレトン、ブルターニュ、アステゥリアス等の汎ケルト音楽に加えて、ギリシャ音楽にジャズにオペラ等まで、二人の得意とする音楽の幅で、フィンガーピッキングとフラットピッキングの妙技を繰り広げる。演奏やアレンジが超秀逸なために、アイリッシュがアイリッシュ＋αの異次元な音楽に生まれ変わっている。加えてクラシック畑の Julia がアイリッシュ等をヴァイオリンで演奏した曲などは、ソフトな音色が耳に心地よい。ギター妙技を尽くした様々な音楽を堪能して、最後はアイリッシュで気持ち良く幕を閉じる。ライヴでこの完成度、尋常じゃない。おまけに二人は唄まで。2019 作。Greentrax)

[リイシュー/Historic Recording]

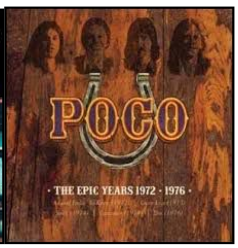
(LP/U. S. A.)

*SHIRLEY COLLINS:The Ballad Of Shirley Collins　　¥2990
(限定カラー{桃色}LP 盤。Shirley Collins のドキュメンタリー映画から音楽を寄せ集めた 21 トラック収録の編集盤。米国フォーク～ルーツ音楽の素晴らしきドキュメント。2018 作。Earth)

(CD/U. S. A.)







(John Hiatt)　　(Emmylou & Linda)　　(Poco)

*JOHN HIATT:The Little Box Of John Hiatt　　¥2590
(9/25 入荷予定。信じられないようなライヴ音源三枚組ボックスセット。ディスク 1 は 1983 年のカリフォルニアのコタッティでの Ry Cooder とコラボのライヴで 16 曲収録。ディスク 2 は 1988 年のカナダのオタワでのライヴで 14 曲収録。ディスク 3 は 1992 年のサンフランシスコでの Ry Cooder, Nick Lowe, Jim Keltner 等で結成されたLittle Village とのライヴで 13 曲収録。1983 年/1988 年/1992 年/2019 作。Broadcast Archive)

*EMMYLOU HARRIS & LINDA RONSTADT:Girl's Night Out　　C
(9/25 入荷予定。副題"The Classic 1999 Broadcast Recording"。

かつて聴き親しんだ名曲ずらりの 29 曲収録の二枚組。楽しみ！
1999 年/2019 作。Left Field Media)

*POCO:The Epic Years 1972-1976 ¥3990
("A Good Feelin To Know"{1972 年。"I Can See Everything"のリミックス・ヴァージョン入りで全 11 曲},"Crazy Eyes"{1973 年},"Seven"{1974 年},"Cantamos"},"Live"{1976 年}の五枚組ボックスセット。ディスクのデザインが各ジャケットの色に合わせたカラフルなデザイン。一番好きな時代の Poco なので仕入れました。保存版。2019 作。Hne)







(Artistic Hair) (AffordableArt) (Unfinished)

*STEVE GOODMAN:Artistic Hair B
(1983 年作"Artistic Hair"に 1994 年作のアンソロジー"No Big Surprise"のライヴ音源曲 10 曲を加えた全 22 曲。1983 年/2019 作。Ominivore)

*STEVE GOODMAN:Affordable Art B
(1984 年作"Affordable Art"に"Street Of London"を含む 1983 年の未発表ソロ・ライヴ音源曲 7 曲と 1994 年作のアンソロジー"No Big Surprise"のライヴ曲 1 曲を加えた全 20 曲。1984 年/2019 作。Ominivore)

*STEVE GOODMAN:Unfinished Business B
(1987 年作"Unfinished Business"にソロを中心にした未発表ライヴ音源曲 9 曲{内一曲は"Don't Get Sand In It"のデモ曲}と 1994 年作のアンソロジー"No Big Surprise"のライヴ曲 1 曲を加えた全 19 曲。1987 年/2019 作。Ominivore)

*GENE CLARK & FRIENDS:Live At The Three T's B
(1985 年５月にインディアナのクラブでの Gene Clark と仲間達の FM ラジオ収録ライヴ。確認できる仲間達は元バーズの Michael Clark と John York に元ビーチボーイズの Blondie Chaplin に元フライング・ブリトー・ブラザーズの Rick Roberts。ディランの "It's All Over Now,Baby Blue"そして自作曲"Just An Arrow"と自身のギターの弾き語りで静かにフライトを始める本作は、三曲目でヴォーカルが Blondie に変わって、ストレートなロック、続く四曲目と五曲目はザ・バンド風ロックという風で、気骨ある Gene Clark の弾き語りとザ・バンド風ロックとカントリーっぽくない時代のバーズ風ロックが混在した弾き語りを含めてエネルギッシュなライヴ。1984 年に"Firebyrd"をリリースしたあとに自身の音楽活動を総括するようなライヴ活動をやっていたんだね。1985 年/2019 作。Leftfield Media)

*J.J.CALE:Stay Around A
(2013 年に他界した J.J.Cale の未発表曲集。収録曲は 15 曲。未発表曲のコンピレーションなのに新作アルバムとして完成度が高い。2019 作。Because Music)

*THOMAS JEFFERSON KAYE:Thomas Jefferson Kaye C

(Bob Neuwirth や Gene Clark のプロデューサーでもあった SSW の Thomas Jefferson Kaye のファースト･ソロ。元々スワンプ志向の音楽性を持つ Thomas がカリフォルニアに移って制作した西海岸産スワンプ風ロック。Donald Fagen や Walter Becker や Rick Derringer に加えて、女性スワンプ･シンガー隊の Clydie King, Venetta Fields 他のまでも起用したロックは、「スワンプ志向」で結集していて、完璧。1973 年/2016 作。紙ｼﾞｬｹ。韓国 Big Pink)

*ORPHAN:Everyone Lives To Sing C

(Orphan{Eric Lilljequist{ヴｫｰｶﾙ､ｷﾞﾀｰ}と Dean Adrien{ヴｫｰｶﾙ､ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ}のフォーク･デュオのバンド}の 1972 年の一枚目。ゲストで参加の Jonathan Edwards の唄にも通じるヒューマンな味わい。1972 年/2016 作。紙ｼﾞｬｹ。韓国 Big Pink)

*JOHN PRINE:Bottom Line ¥2690

(二枚組ライヴ。1978 年、ニューヨークのボトムラインでのライヴ。FM ラジオの音源から全 30 曲。"Pink Cadillac"収録のメムバー{John Burns, Howard Levy, Tom Pickarske, Angelo Varias}がバックアップ。1978/2015 作。All Access)

*LEE CLAYTON:Live At Rockpalast A

(CD＋DVDｾｯﾄ。Lee Clayton Band～Lee Clayton{ヴｫｰｶﾙ､ｷﾞﾀｰ､ﾊｰﾓﾆｶ}, Philip Donnely{ｷﾞﾀｰ}, Colin Cameron{ﾍﾞｰｽ}, Tony Newman{ﾄﾞﾗﾑｽ}～の 1980 年、ドイツのテレビ番組のショー向けスタジオでのライヴ。CD は DVD のオーディオ版。全 15 曲。1980/2014 作。Repertoire)

*CASEY KELLY:Casey Kelly A

(C. Kelly の 1 枚目。バックは Leland Sklar, Russell Kunkell, Craig Doerge。そして Sneeky Pete, Jim Messina, Al Garth 等がゲスト。プロデュースは当時 Poco のプロデューサーだった Richard Sanford Orshoff。CD-R 仕様。It'sAboutMusic.com)

*POET "A Tribute To Townes Van Zandt" C

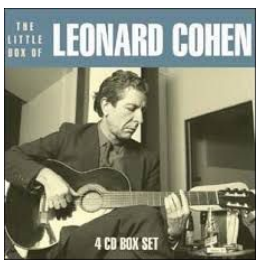
(Guy Clark, Nanci Griffith, Billy Joe Shaver, Cowboy Junkies, Emmylou Harris, Ray Benson, John Prine, Lucinda Williams, Flatlanders, Robert Earl Keen, Steve Earle And The Dukes, Willie Nelson, Delbert McClinton, Pat Haney, John T. Van Zandt{収録シンガー順}によるトリビュート･アルバム。2002 年。Catfish)

（CD/Ｕ．Ｓ．Ａ．{国内盤}）（検品してお送りします）

*DON NIX:In God We Trust(Vivid) ¥2800

*JIM PULTE:Out The Window＋Shimmy She Roll, Shimmy She Shake(一枚目と二枚目の 2in1。Vivid) ¥2800

（CD/ＣＡＮＡＤＡ）



(Leonard Cohen)

*LEONARD COHEN:The Little Box Of Leonard Cohen　　D
(9/23 入荷予定。Leonard Cohen のライヴ音源からの四枚組ボックスセット。全 51 曲収録。ディスク１は 1968 年の BBC 音源。ディスク２と３は 1976 年の Montreux Jazz Festival などからのベスト･ライヴ音源。ディスク４は 1988 年の Austin City Limits からのライヴ音源だそうです。久し振りに Leonard Cohen 節がたっぷり味わえそう。楽しみ！2019 作。The Broadcast Archive)

（LP/ＢＲＩＴＩＳＨ　ＦＯＬＫ）

*BERT JANSCH:Moonshine　　¥2690
(名盤中の名盤。LP 盤。1973 年作。1973 年/2015 作。Earth)

*BERT JANSCH:L.A. Turnaround　　¥2890
(名盤中の名盤。1000 枚限定カラー{青}LP 盤。アルバム未収録曲４曲を追加収録したダウンロード･コード付。1974 年作。1974 年/2018 作。Earth)

（CD/ＢＲＩＴＡＩＮ＆ＩＲＥＬＡＮＤ他）



(Henry McCullough)

*HENRY McCULLOUGH:Ballywonderland　　B
(9/18 入荷予定。2016 年に他界した Henry McCullough の 1998 年作"Blue Sunset"以降の音源からのコンピレーション CD。全 15 曲収録。Gary Brooker,Nick Mason,Paul McCartney,Chris Stainton,Albert Lee,Paul Carrack & Paul Brady による未発表ライヴ音源曲"Live Long Rock & Roll"を含む。本人から CD を仕入れていた頃が懐かしい。2019 作。Absolute)

*DONOVAN:Bottom Line 1976　　B
(Donovan の 15 枚目"Slow Down World"リリース直前の 1976 年４月にニューヨークのボトムラインで行われた FM ラジオ収録ライヴ。"Slow Down World"収録の Dark Eyed Blue Jean Angel"と The Mountain"に"Catch The Wind","Lalena,"Mellow Yellow","Hurdy Gurdy Man"等の名曲ほか全 19 曲。ギターの弾き語りを中心にしたスタイルによる Donovan の唄は終始絶好調。まるで特等席で楽しむドノヴァン･ライヴ 1 時間 20 分。1976 年/2019 作。Unicorn)

*DAVE WAITE & MARIANNE SEGAL:Paper Flowers　　A
(英国のフォーク･ロック･バンドの Jade の Dave Waite と Marianne Segal が Jade 結成以前にデュオで活動していた時代の 1967～1970 年の未発表音源から 22 曲を収録した編集盤。70 年代前後の米国のピュアな女性フォーク･シンガーの趣があって、その若草の香りの Marianne のヴォーカルと Marianne & Dave のヴォーカル･デュエットが新鮮。この時代、英国の若いフォーク･シンガーもミュージシャンも、米国音楽への憧れて音楽活動をしてましたよね。その真っ直ぐさと、ほのかに香る英国風香りが気持ち良い。2004 作。Lighting Tree)

*THE LYLE McGUINNESS BAND:Elise,Elise　　B
(Graham Lyle,Tom McGuinness,Hughie Flint,Alan Dunn,
Chrissie Stewart の Lyle McGuinness Band の 1983 年の"Acting
On Impulse"から 12 曲にシングル盤収録の"What Does It Take"
と未発表音源曲二曲を加えた 15 曲収録。いつ聴いても幸せ気分
なゆるくて何とも愛おしい二流センスの英国ロック。ゲスト:モ
イア・ブレナン{クラナド}。1997 作。Diamond Recordings/検品し
て送ります)
*BERT JANSCH:A Man I'd Rather Be (Part 2)　　¥4980
(ハードカバーブック型四枚組ボックスセット。ディスク１は 1967
年の"Nicola"",ディスク２は 1969 年の"Birthday Blues",ディス
ク３は 1971 年の"Rosemary Lane",ディスク４は 1973 年の
"Moonshine"。ブックレットは英 MOJO Magazine 誌のライター Dave
Henderson による新たな解説や未使用ジャケット候補など未公
開写真など。保存版。2018 作。Earth)
*WIZZ JONES:Wizz Jones　　C
(これが Wizz Jones のソロー枚目。本作が発売された 1969 年という
時代に、もう既にギター・スタイルもヴォーカル・スタイルも完成
していて驚かされる一方で、彼が傾倒した米国ルーツ音楽の華や
ぎがちらほら音楽に顔を出していて面白い。ライナー・ノーツは
Long John Baldry。Long John は Wizz のバスキングの友だったそ
うだ。w.Clive Palmer,Dave Deighton。1969 年/2017 作。紙ｼﾞｬｹ。
韓国 Big Pink)

[CD/ＵＳＡ]



(Rodney Crowell)　(Old Salt Union)　(Rob Ickes & Trey Hensley)

*RODNEY CROWELL:Texas　　A
(Rodney Crowell のぶっ飛びの新作。豪華ゲスト・シンガー{Willie
Nelson, Steve Earle,Ringo Starr,Lyle Lovett,Ronnie Dunn,
Billy F Gibbons,Randy Rogers,Vince Gill,Lee Ann Womack 等の
他との共演による本作は、「共演」という見えざる力も働いてか、
主にルーツロック・スタイルのロックは、かつてないほどストレ
ートで泥臭く、手に汗握るし、数曲の彼本来のカントリー風フォ
ーク・スタイルのフォーク～カントリー・ロックは、味わいが深い。
ゲストの顔ぶれに注目が行きがちだが、音楽を聴けば、Rodney のシ
ンガーとしての力量とバック・バンドの力量とががっちりかみ合
った豊穣なアメリカンＳＳＷアルバムであることが分かる。その
辺は共同プロデューサーの Ray Kennedy の手腕もあるだろう。病
み上がりなんて信じられないパワフル作だ。2019 作。RC1)
*OLD SALT UNION:Where The Dogs Don't Bite　　A
(2014 年の Freshgrass Band コンテストで優勝の Old Salt Union の
待望の新作で Compass からの二枚目。Old Salt Union は米国中西
部を拠点に活動する五人の若武者から成る最高にご機嫌なニュ

ーグラス～カントリーロック･バンド。若々しさと初々しさと輝き感のある音楽は本作でも絶好調。メムバーの内三名が SSW で、それぞれの持ち唄をバンジョー、マンドリン、ギター、フィドルの軽やかなサウンドの風に乗って、土臭いヴォーカルとハーモニーで心底楽しませる。"Old Salt Union has the groove and the chops of a great string band, balanced with infectious rock and roll energy"の No Depression のコメントは Old Salt Union の音楽を的確に表現。メッチャ気分爽快。2019 作。Compass)

*ROB ICKES & TREY HENSLEY:World Full Of Blues
(9/25 入荷予定。ゲスト:Taj Mahal,Vince Gill。2019 作。Compass)

*BUDDY & JULIE MILLER:Breakdown On 20th Ave. South A
(Buddy & Julie 夫妻の 10 年振りの新作。現在 Julie は病気療養中で回復の見通しが立たない状況で、本作は Julie の寝室に階下の自宅のスタジオから録音機材を運び込んで収録したという。確かに Julie のヴォーカルはかつてのパワーは影を潜め、精気のないヴォーカルに聞こえる。それを補っているのが、Julie のスローな唄に寄り添うようにうたう Buddy の覇気ある唄と手作りの気概あるルーツロック･サウンドだ。そして Buddy の励ましに後押しされるように Julie は声を振り絞る。感動無しには聴けない夫婦の強い絆から生まれた稀有のアメリカン･ルーツロック。2019 作。New West)

*REX FOSTER:Heart A
(2016 にリリースされた"The Lost Recordings"で 1970 年に名盤と呼ばれているＳＳＷアルバムを出していることを知ったテキサスのＳＳＷの Rex Foster の新作で通算九枚目。Gary P. Nunn や Townes Van Zandt や Guy Clark と同時代を生きてきた今の Rex の唄は、かくしゃくとした気骨さを持ちつつ、角が取れて丸っこい。何かうたいこんだ末に身につけた歌心のようなものが、凄く自然体の唄とフォーク～カントリー･ロックなサウンドから感じられる。じわりじわりと唄物語の世界へと誘う Rex の味のある唄にはゾクゾクっとすらする。Dan Cooper や Peter Rowan との共作を含む心ほほえむ全 10 曲。2019 作。Steadyboy)

*HILLBENDERS:HillBenders A
(五人組ブルーグラス･バンドの Hillbenders の結成 10 周年の新作。Flying Burrito,Chris Hillman,Herb Pedersen,Bernie Leadon そして New Grass Revival などの音楽と生き写し なカントリー･ロック。2018 作。Compass)

*GEORGE ENSLE:Home A
(1948 年 9 月生まれというから 70 歳代になったテキサスのＳＳＷの大御所 George Ensle のおよそ 10 年振りの新作。一つ一つ思い出を思い出すようにギターやレゾネイターギターを弾き語るようにうたう George の唄の何と心優しく心和むことだろう。過ぎ去ったことすべてが懐かしい思い出の唄になっていて、唄からしみじみ感やほほえみ感がやんわりとにじみ出ている。６歳年上の Jerry Jeff Walker 翁が春の風景でもながめながら、ゆったりと手作りの思い出の唄をうたった感じだろうか。全曲で Mike Rieman{ﾍﾞｰｽ}と Dony Wynn{ﾄﾞﾗﾑｽ、ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ}がバックアップしているが、音が優しい。本作は Richard J.Dobson の霊と仕事に捧げられている。2018 作。George Ensle)

*GEORGE ENSLE:Build A Bridge A

(Townes Van Zandt が「George Ensle は最も影響力のある尊敬すべき SSW の一人」と賞賛するテキサスのＳＳＷの George Ensle の 2008 年作。どことなく Jerry Jeff Walker 風なのだが、Bill Staines 風でもあって、唄に爽やかさが感じられる。2008 作。Berkalin/検品してお送りします)

*POINT QUIET:Walking In The Wild A

(Point Quiet は SSW の Pascal Hallibert 率いるオランダの五人組だが、音楽は一応ルーツロック系だが、シンガーの Pascal のソロ・アルバム的色合いが濃い。オランダのシンガー＆バンドというのは忘れた方が良い。Pascal の唄は実に緩く渋い。Lenard Cohen 風に詩的に練り上げられた唄は、超然とすら感じられもする。そして滋味 豊かな彼の唄は、聴けば聴くほど味わいが深い。究極のスルメ味ＳＳＷアルバムと言っても過言ではない。前に出ない奥行きのある「音」も職人技。名盤の域。2019 作。Continental)

*MICHAEL MCDERMOTT:Orphans A

(ナッシュビルの Collard Green スタジオで録音されたヴェテランＳＳＷの M.Mcdermott の新作。ミュージシャンとしてクレジットされた 10 名の中にはナッシュビル在住のＳＳＷの Will Kimbrough の名も。録音はナッシュビルだが、音作りはカントリー色の薄い小気味よくノリの良いルーツロックで、ロックの躍動と一体化した Michael 本人の表現力豊かで陰影に富むヴォーカルが実に素晴らしい。自作の唄に悲喜こもごも感があって、感動の幅が広く深い。2019 作。Pure Sky)

*CODY CANADA & THE DEPARTED:3 A

(本作でのバンドの編成は Cody Canada{ヴォーカル、エレキ&アコースティック・ギター他}と Jeremy Plato{ヴォーカル、ベース他}と Eric Hansenheavy{ドラムス}の三人組ルーツロック・バンドの四枚目。リーダーの Cody Canada はテキサスのレッドネック・シンガーのタイプで、テキサス・スタイルのフォークやルーツロックをベースに南部ロックや西海岸ロックにまで色気を出して、バンドのフォーク～ロックを彩る。ヴェテランの風格。2018 作。Blue Rose)

*JACK GRELLE:Got Dressed Up To Be Let Down A

(聴くなり馴染んで、すぐに和んでしまった、まるで 70 年代の緩く Jack Grelle の唄は John Prine っぽいが、Michael Hurley のようなとぼけた悠長さもあったり、Jesse Colin Young と彼の仲間のラクーン・レコード一派の音楽のような 70 年代の西海岸田舎志向カントリー・ロック風のんびり感もあったりで、個人的に全くの好み。心も体もニコニコ保証。2016 作。Big Muddy)

*MUSTARD'S RETREAT:5 Miles Or 50,000 Years a

(1970 年代から活動する二人組{David Tamulevich & Michael Hough)の 1990 年のライヴで発売は 1993 年作。本作は約半数が二人の心温まるオリジナル曲で、米国フォーク流のストーリーテリングな唄の世界を楽しませる。全 14 曲。1993 作。Mustard's Retreat /発売年の古い CD ですので、検品をしてお送りします)

*PROFESSOR LOUIE AND THE CROWMATIX:Wings On Fire a

(The Band のﾛｯｸ・ｽﾋﾟﾘｯﾄを受け継ぐｳｯﾄﾞｽﾄｯｸのﾛｯｸ・ﾊﾞﾝﾄﾞの本作は Rick Danko と Levon Helm に捧げられたもので、そのｽﾋﾟﾘｯﾄは一段と高潔。彼らのﾛｯｸは Levon Helm のｽﾀｲﾙを基本にﾆｭｰｵｰﾘﾝｽﾞ色やﾛｯｸ色を濃くしたもので、そのｴﾈﾙｷﾞｰは熱い。ｹﾞｽﾄ:John Platania, Michael Falzarano。2012 作。Woodstock)

*ANDREW CALHOUN:Living Room a
(本作で聴く Andrew の唄は、唄に揺ぎがなく、大きな優しさのようなものが感じられて、Andrew の SSW としての成長というか、円熟味が感じられるもの。自室でアコースティック・ギターを爪弾き、リラックスしてうたう Andrew の数々は、心穏やかにする。w.Casey Calhoun{Andrew の娘さん。素直な唄が気持ち良い}、Tracy Grammer, Jenna Rawling, etc. 2013 作。Waterbug)
*THE NORMAN FISHINTACKLE CHOIR
:One Kind Of Bait In The Bucket a
(72 年作"Out The Window"と 73 年作"Shimmy She Roll, Shimmy She Shake"の Jim Pulte のバンドの 2007 年作。Windstorm)

[CD/ＵＳＡ{female}]



(Jude Johnstone) (Joan Shelly) (Davina & The Vagabonds)

*JUDE JOHNSTONE:Living Room B
(9/23 入荷予定。当店で特に人気のヴェテラン女性 SSW の Jude Johnston の三年振りの新作。本作はナッシュビルの自宅での生録音で、男性 SSW とデュエットしたアルバム。YouTube で新作のプロモーション・ビデオを観たが、初めて聞く名ばかりの SSW のヴォーカルとその自作曲が実に素晴らしく、まるでゴスペルでもうたうかのような魂と魂が響き合う唄たちは、恐ろしく感動的。デュエットのお相手は Ben Glover, Hunter Nelson, Brandon Jesse, Tim Hockenberry という名の SSW 達。2019 作。Bojak)
*JOAN SHELLY:Like The River Loves The Sea A
(前作"Joan Shelley"も素晴らしかったが、待望の本作も素晴らしい。アイスランドで異世界に身を寄せた心持ちで収録された本作は、基本的に前作のように「静寂感が漂うなか、ひっそりとして陰りのある唄の何と魅力的なこと！そんな Joan の唄も Nathan Salsburg のギターを要にしたアコースティックなサウンドも、引く唄の魅力というか、闇の中でかすかに光るような夢幻な響きがあって、そっと彼女の唄の世界へと引き寄せられる気分」は、アイスランドのヴァイオリンとチェロの奏者の参加も功を奏して、一層深まっている。終始至福保証。ゲスト:Bonnie "Prince" Billy, Cheyenne Mize, Julia Purcell。2019 作。。No Quarter)
*DAVINA SOWERS AND THE VAGABONDS:Sugar Drops A
(ミネソタを拠点に 2006 年から活動する Davina & The Vagabonds の新作。古いブルースやジャズの世界を往年の黒人女性シンガーのムードとサウンドを体現するシンガーやグループの中でも、彼らは 1930～40 年代のディキシーランド・スタイルのホーン・セクションを伴ったニューオーリンズ音楽をベースに独自のレトロ音楽を魅力的に体現している上に、Davina のハスキーでブルージーなヴォーカルは、往年の黒人女性シンガーのムードばっちり。しかも Davina はニューオーリンズ風レトロなサウンドの海を泳

ぐようにうたう。Dr.John がレパートリーにしたら、これまたハマって生えそうな曲とサウンドがずらり。ムードだけではなく味わいが深い。流石 13 年のキャリア。2019 作。Red House)

*LOUISA BRANSCOMB:Gonna Love Anyway A

(ブルーグラス系のヴェテラン女性 SSW の Louisa Branscomb の新作で通算 12 枚目。Missy Raines との共同プロデュースによる本作はハイブリッドなカントリー・フォークの趣き。小気味良いブルーグラス・サウンドは極めて上質感があり、Louisa のヴォーカルも男女のゲスト・シンガーとのデュエットも清々しさの中に鼻歌でもうたうかのような、かつ一緒にうたったり、ルイーザと彼女の友達的な心通う音楽になっている。共演者もヴェテラン揃いだが、唄も演奏も熟練者ならではの味わいが実に軽やかに醸し出されている。w.Alison Brown,Dale Ann Bradley,Missy Raines,Stuart Duncan,Sierra Hull,Molly,etc. 2019 作。Compass)

*ANNA TIVEL:The Question A

(異色の女性 SSW の Anna Tivel の新作は、上下逆さのジャケット写真のような？非日常感が心地よい SSW アルバム。リラックス・ムードでささやくようにうたう Anna の唄は、どんよりした曇り空のような、或いは夜空に光る月明かりのような感触で、そっと夢見心地な気分へと誘う。音楽的にもフォーク、ロック、ジャズをとろーりと混ぜ合わせて、ハイセンスに練り上げたようなサウンドで、奥が深く、味わいも深い。異色のシンガーによる格別なアルバム。w.Shane Leonard{各種ｷﾞﾀｰ、ﾄﾞﾗﾑｽ、ｼﾝｾ他}、Courtney Hartman{ｴﾚｷ&ｱｺｰｽﾃｨｯｸ・ｷﾞﾀｰ},Ben Lester{ﾍﾟﾀﾞﾙ・ｽﾃｨｰﾙ、ﾋﾟｱﾉ他},Jeremy Boettcher{ﾍﾞｰｽ},Josh Gallagher{ｳｰﾘｯﾂｱｰ、ｵﾙｶﾞﾝ他}、Jeffrey Martin{ｳﾞｫｰｶﾙ他},etc. 2019 作。Fluff&Gravy)

*ALELA DIANE:The Pirate's Gospel(Deluxe Edition) C

(Alela Diane の 2006 年のデビュー作に未発表音源曲 10 曲を加えて、新たに二枚組で発売されたデラックス版。本作は過去と未来や人生、死、誕生などについて思索した自作の唄を父親のスタジオで録音したもので、唄もギターの伴奏もいたって素朴ながら、唄の味わいはどのフォーク系シンガーよりも深いと思えるほど深い。感情を押し殺し、投げやりにも感じられる彼女の唄は、心に深く響く。名盤中の名盤。2006/2018 作。Rusted Blue)

[CD/ＣＡＮＡＤＡ]

*THE SMALL GLORIES:Assiniboine & The Red A

(Small Glories は Wailin' Jennys のオリジナル・メムバーの Cara Luft とマルチ楽器奏者{本作ではアコースティック＆エレキギターを担当}でシンガーの JD Edwards の二人組。実績のある Cara のシンガーとしての魅力は承知していたが、相方の JD Edwards も、ルーツ志向タイプのシンガーとしても凄い魅力なのを知った。阿吽の息で絞り出すようにうたう二人のヴォーカルは、土埃舞うルーツ・サウンドを伴って、信じられないほど見事な男女のヴォーカル・デュエットを見せつけている。近年、これほどヴォーカルもサウンドもドラマティックで覇気あるルーツ・ロックを聴いたことがない。アルバム・タイトルはカナダの大平原を流れる二つの川の合流地点の意で、二人の心はカナダの大平原の中。2019 作。Compass)

*AD VANDERVEEN:I Was Hank Williams A

(かつて Iain Matthews､Eliza Gilkyson とトリオで"More Than A Song"を発表したことのあるカナダ系ドイツ人 SSW の Ad Vanderveen の本作は､フォーク･シンガー/SSW としての原点に帰るうたうことに真っ直ぐなアルバム。ギターの弾き語り のみならず､適度にロック的な音作りがなされたナムバーやホーンや女性ハーモニーが入るナムバーもあるが､いぶし銀の唄の味わいは､SSW アルバムとして円熟度を極めていて､アルバムを通して渋く感動的。2018 作。Blue Rose)

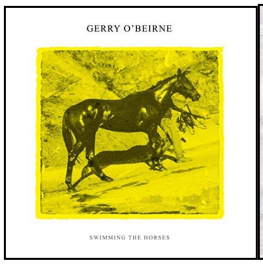
*HIDDEN AGENDA DELUXE & OH SUSANNA:Angels In The Snow A

(オランダのヴェテラン･アメリカン･ロック･バンドの Hidden Agenda Deluxe がカナダの女性 SSW の Oh Susanna をメムバーに招いて制作したクリスマス･アルバム。The Band の"Island"収録の"Xmas Must Be Tonight"で The Band 風いぶし銀ロックで幕開けする本作は､いぶし銀アメリカン･ロックから SSW 風そして Oh Susanna のヴォーカルをフィーチャーした女性 SSW 風と聴かせ所色々。2018 作。 Continental)

*IAN TAMBLYN:Side By Each A

(海の生き物に心を寄せ､旅の思い出を回想する Ian の心の唄は､本作において､一段と穏やか。w.Rebecca Campbell,Fred Guignion, Pat Maher。2013 作。North Track)

[CD/ＵＫ, ＩＲＥＬＡＮＤ]



(Gerry O'Beine)



(Louise Connell)



(Rachel Sermanni)

*GERRY O'BEIRNE:Swimming The Horses B

(Patric Street の元メムバーで､Kevin Burke & Michael O'Mhomhnaill の名作"Promenade"のプロデューサーでギター名手で､そして詩情豊かな自作の唄をうたうの Gerry O'Beine の SSW アルバムとしては､何と 20 年振りのアルバム。1999 年作の"Half Moon Bay"は今も宝物。12 弦ギターの弾き語りで静かに始まるアルバム･タイトル曲{曲名の意味は中に書かれた詩を読めば解る}からまるで白日夢でも見ているかのような､Gerry 独特な得も言われぬ唄の世界へと誘われる。6 や 12 弦ギターなどのギターをマジカルに弾きこなし､アイルランド人の魂を揺さぶる不思議感覚の唄を夕日を眺めながらギターの弾き語りしているようにうたう。Pauline Scanlon,Muireann Nic Amhlaoibh,Ellis Kennedy, Seamus Begley,Meabh Ni Bheaglaioch などのシンガー達による柔らかなハーモニーがまた何とも言えない安らぎ感を添えている。ちなみに"Golden Hair"という曲はジェイムズ･ジョイスの詩"Lean Out Of The Window"に Gerry が曲を付けた曲。言葉では表現出来ない素晴らしさだ。2019 作。Gerry O'Beirne)

*GERRY O'BEIRNE:Half Moon Bay B

(10 数年振りの販売。ジュエルケース仕様のオリジナル盤{今回販売分はデジパック仕様}を久し振りにご賞味。何たる素晴らしさ！繊

細系 SSW アルバムの名盤であることを再確認。録音はダブリン、エディンバラ、ナッシュビルの三箇所だが、この頃 Gerry O'Beirne 氏はナッシュビルに住んでいたんだね。オリジナル盤は 1997 年のコピーライトだが、デジパック版は 1999 年のコピーライト。本人に尋ねたら、「自分では 1997 年と思っていたんだけど、セカンド・プレスの時になぜか 1999 年に変わっちゃったんだ。なぜだたか忘れたよ」と。Gerry O'Beirne)

*LOUISE CONNELL:Squall Echo Tale B

(美しい女性 SSW アルバムだ。スコットランドの女性 SSW の Louise の本作は、これまでにリリースした三枚のシングルを一枚のアルバムにまとめた 18 曲収録のファースト・アルバム。細やかな神経の行き届いたシンプルでエレガントな美しい音楽と感受性豊かで細やかなニュアンスに富む印象的なヴォーカルは耳に新鮮で、フォーク風だが、ヴァイオリンやチェロが優雅さを演出し、ウクレレやギターが夢っぽさを演出し、エレキギターが爽快さを演出し、新感覚のフォークを超えた独自の音楽世界を創作している。曲順はシングルのリリース順のようで、歌唱を含めて、音楽表現に細やかさが増していることがわかる。ヒドゥン・トラックに可愛らしい曲が隠されている。ジャケットは英国の著名ヴィジュアル・アーティストの James Marsh によるもの。2019 作。9th Story)

*RACHEL SERMANNI:So It Turns A

(スコットランドの女性 SSW の Rachel Sermanni の新作で三枚目。スコットランドから離れて、ベルリンの Jazzanova スタジオでライヴ録音された本作は、Rachel のささやくような不思議感のあるヴォーカルは自身のキラキラ感のあるギターなどを伴って、じわりじわりと川のせせらぎ感や森の木漏れ日感が感じられる彼女独特なアンニュイな世界へと誘う。音楽的にはフォークからフォーク・ロックの幅の音楽だが、創作された音楽は Rachel のナチュラル感のあるヴォーカルに呼応して、有機的なナチュラル感があって、Rachel の唄と空気のように一体化している。ある種、デジタルな音楽とは真逆のヒューマンな音楽。稀有な感性と才能を持つ女性 SSW による稀有なアルバムだ。Rachel Sermanni のサイン入り。2019 作。Rachel Sermanni)

*ODETTE MICHELL:The Wildest Rose B

(素朴な味わいが素敵なハートフォードシャーを拠点に活動する女性 SSW の Odette の初アルバム。トラッド曲"True Lovers Farewell"以外の曲は全曲 Odette の自作曲。Megson の Stu Hanna のプロデュースによる本作は、ほのかに英国トラッドの香りのする爽やかで、愁いのあるブリティッシュ・フォーク。ある種 70 年代の純良英国フォークとして素直に「良いなあ」と思ってしまう。プロデューサーの Stu に加えて、Phil Beer や Cara Dillon のツアー・メムバーの Toby Shaer のお二人が心から付き添って、野のバラのように美しい Odette の着飾らない唄を優しく引き立てている。2019 作。Odette Mitchell)

*NIGEL RICHARD:Not Before Time B

(本職はバグパイプほか楽器職人。Bert Jansch の一枚目を聴いて人生が変わったというスコットランド人 Nigel Richard の本デビュー作は、何と初期 Bert Jansch や初期 Davy Graham などの創世記のブリティッシュ・フォークのようなミラクルな空気感に満ちたブリティッシュ・フォーク。全曲 Nigel の自作曲で、ギターのサウ

ンドは前述お二人のギターの響きを発し、Negel のヴォーカルは、飾りっ気がなく素朴。その素朴さに何とも言えないヒューマンな味わいが醸し出されていて、そう言えば 70 年代の SSW にもこんな感じの SSW がいたっけ、と懐かしい気分になってしまった。Ross Ainslie や Amy Geddes ほか全８名もの伴奏者と３名のホーン奏者がクレジットに名が記されているが、音楽は Nigel のギター又はシターンの弾き語りをベースにした毅然たるブリティッシュ・フォーク。Bert&John そして Davy Graham は笑顔保証。2019 作。Garvie Music)

*JOANNA HYDE & TADHG Ó MEACHAIR:One For The Foxes B
(ゲスト・シンガーの Roisin Ni Ghallogaigh とのデュエットによるイエーツの"Prelude"で幕開けし、同じく二人のデュエットによるイエーツの"Tread Softly"で幕を閉じる Joanna Hyde{ヴォーカル、フィドル}と Tadhg Ó Meachair{アコ、ヴォーカル}の男女の二人組による本作は、女性フォーク・シンガーとアイリッシュがミックスした清々しいアイリッシュ。2017 作。Joanna Hyde & Tadhg Ó Meachair)

*NAOMI BEDFORD:Tales From The Weeping Willow B
(Naomi はまるで英国の Emmylou Harris。今の Emmylou ではなく、70 年代の。Naomi の声の響きは白人系アメリカン・ルーツ音楽の故郷のような響きなのだが、土臭さよりはむしろ優美さや夢見心地感が感じられるもの。鮮やかなアコースティック・ギターの伴奏を中心にしたサウンドも新鮮。2011 作。Dusty Willow)

*PAUL MILLNS:A Little Thunder B
(15 歳の時に聴いた Ray Charles の"Georgia On My Mind"のパワーとエモーションにぶっ飛んだという彼は、その後 Bob Dylan や Tim Hardin などの影響を受けて、SSW の道を歩み始めて、四十数年。Joe Cocker 風ブルージーなヴォーカルは今もなお健在。ある意味 Paul Millns 流ゴスペル・アルバムとも呼ぶべき孤高の境地の音楽。2019 作。Acoustic Music)

*PAUL MILLNS:Unsang Heroes B
(Paul Millns の 1997 年録音で 1998 年リリースのアルバム。1998 作。April Music)

*IAIN MATTHEWS:Contact C
(2004 年 12 月ドイツでのアコースティックなライヴ。w.Richard Kennedy{ギター、ヴォーカル}, Mike Roelofs{エレクトリックピアノ}。"Woodstock"を含む全 14 曲。CD-R 仕様。2007 作。It'sAboutMusic.com)

*CHRIS MANNERS:Exit, Pursued By A Bear B
(イングランドのＳＳＷでギター奏者の Chris Manners の新作で通算三枚目。第一印象は"Rosemary's Sisters"の Huw & Tony Williams。鮮やかなブリティッシュ・フォークなギターを爪弾きうたう唄は、きっちりブリティッシュ・フォーク的抒情を香らせていて、至福気分になる。そして骨董品的価値と言うと失礼だが、今も変わらずブリティッシュ・フォークの基本スタイルを悠々と貫いている Chris 氏にエールを送りたくなる。Chris の相棒の Tim Blythe{ハーモニー・ヴォーカル、マンドリン、ブズーキ、ギター他}と Jon Loomes{ヴァイオリン、アコ}の二人のミュージシャンが共演。唄心あるシンガーによる良き唄が全 15 曲。2019 作。Shutterstock)

*ALISON O'DONNELL:Exotic Masks And Sensible Shoes A
(Mellow Candle の Alison O'Donnell の新作。前作"Climb Sheer The Fields Of Peace"の延長線上の独自の「夢のようなドラマ」

は本作ではシンプルに深みを増している。本作のサウンドの中心を担うのはカナダ人ピアニストの Kevin Scott。ピアノのみならず、ハープシコードやオルガンも奏でて、唄目線で Alison の夢のような唄を引き立たせる演奏をしている。そういう意味では、どちらかと言えば、夢想色に彩られた前作に較べ、弾き語り的志向性の強いＳＳＷ的な味わいが深まっている。かつてなく Alison の夢のような唄が身近に感じられる唄達だ。お年寄りと呼ばれる歳になっても、Mellow Candle 時代とめざす音楽の世界が変わらないのは凄い、と思う。2019 作。Floating World)

*ALISON O'DONNELL:Climb Sheer The Fields Of Peace　　A
(Alison O'Donnell の 2017 年作。Mellow Candle 時代の音楽、その美意識と通底する音楽を齢を重ねた Alison がひとり、今の目線で創作したのが本作。Alisin の頭の中は独自の「夢のようなドラマ」を創作すること。アイルランド人ギター＆電子楽器奏者で SSW でもある Dave Colohan。Dave は Alison が描く唄の世界に寄り添い、必要最小限の美麗な音響を創作し、音で Alison の頭にある「夢のようなドラマ」を彩る。2017 作。Mega Dodo)

*ALISON O'DONNELL:Hey Hey Hippy Witch　　A
(Mellow Candle の Alison の 2009 年作。12 トラック＋1 ボーナス・トラックの全 13 トラック。全曲自作曲。Alison のヴォーカルは終始優美で穏やか。ことさらにフォーク・ロックの衣装で、或いはケルトの衣装で着飾ることはなしに、ただ一人の SSW として、自分の唄を誠実にうたっていて、それだけで滋味豊か。2009 作。Freeworld)

*JO CHEDGEY:D'Anam ALainn　　A
(アイルランド人の女性 SSW の Jo Chedgey の 2009 年作。本作はアイルランドへの美しい思いが込められていて、彼女の思いや思い出と一緒に旅する気分。化粧っ気なしのスッピンの唄が唄の鮮度を落とすことなく聴き手の心に沁み渡る。現在英国暮らしの Jo が、故郷を離れて輝きを増す Jo の珠玉の唄たちだ。2009 作。Osmosy)

*THE BROTHERS GILLESPIE:The Fell　　B
(ノーサンバーランドの James と Sam の Gillespie 兄弟の二枚目に当たる新作。初めて聴く二人のフォーク、兄弟のソロ・ヴォーカルとデュエットと渋いフィドルとギターが織りなすフォークは渋く麗しくかつ愛おしいフォーク。兄弟の穏やかで英国的に愁いのあるハーモニーはそこはかとなく美しい。影響を受けたシンガーとして Dick Gaughan,Anne Briggs,Leonard Cohen,Kathryn Tickell などの名を挙げている。2018 作。Brothers Gillespie)

*MARTYN JOSEPH:Full Colour Black And White　　a
(Martyn Joseph との付き合いは本作から始まった。闇の中から聞こえてくるような Martyn の純な唄達が心に響く。長期間の在庫品で中古～ほぼ新品のコンディション。1996 作。Grapevine)

*PAUL STEPHENSON:Mother Nature's Rules　　D
(ハイブリッド SACD。英国人の SSW の Paul Stephenson の新作。Paul の唄は James Taylor が英国のカントリーサイドで悠々自適の生活を送り、良き隣人達と人生を楽しむかのような穏やかで心和む唄。そんな唄も魅力的だが、彼が奏でるアコースティック・ギターのマジカルな響きも凄く魅力的。アコースティックな高音質にこだわる Stockfisch らしい音響創りがより彼のギター・サウンドの魅力を引き出し、唄と音楽の鮮度を上げる効果をもたらしている。Lea Morris のバッキング・ヴォーカルが心和ませる。2018 作。

Stockfisch)

*REG MEUROSS:Reg Meuross D

(ハイブリッド SACD。もう何枚もソロ･アルバムを発表していて、ヒューマニティーある彼の唄はフォークフェスなどで人気の SSW という。以前のアルバムには Karen Tweed や Phil Beer や Jackie Oates なども参加したという。その Reg Meuross の新譜。初めて聴く Reg の唄は「何て心優しいの！」。メロディはソフトでヴォーカルは深呼吸をするように落ち着きが深い。ここでも Stockfisch のワンランク上を行くアコースティック･サウンドが見事で、夢見心地な Reg の唄を本当に夢見心地にしている。おそらく彼のアルバムでこれほど美しいアルバムはないのでは？！2018 作。Stockfisch)

*ALASTAIR MacDOUGALL WITH PAUL ANDERSON :Trees May Bud B

(A.MacDougall は 1990 年代はじめから活動するというヴェテラン･フォーク･シンガー＆ギター奏者が名スコティッシュ･フィドル奏者の P.Anderson と組んだアルバム。全 12 曲中４曲がトラッド曲に Archie Fisher や Tom Paxton や Darrell Scott 等のフォーク系の唄をうたったもので、それぞれの唄を愛しむようにうたう彼の唄はトラッド･シンガーというよりは、心優しい SSW 風で、気分ほっこりになる。"Songs"という副題を付けたくなるような唄があったかく感じられるアルバムだ。2018 作。Laural)

*GINA LE FAUX:In My Life A

(ほぼ Martin Simpson{ﾄﾞﾌﾞﾛ､ﾃﾚｷｬｽﾀｰ}と Andy Cutting{ﾒﾛｰﾃﾞｨｵﾝ}が全面バックアップする良質の女性ＳＳＷアルバム。Gina のヴォーカルは Iain Matthews のような高音が伸びる男性シンガーのような声質とヴォーカル･スタイルで、M.Simpson の味わいのあるドブロの伴奏で、心象風景や心模様をゆったりとうたう。一曲一曲が唄のスケッチのよう。2009 作。Le Faux Music)

*LUCY WARD:Single Flame A

(2012 年、BBC のフォーク部門で「新人賞」に当たる"Horizon Award"賞受賞の稀有の才を持つ女性 SSW の Lucy Ward の二枚目。Lucy が作る唄は独特だ。英国の昔話、特に不気味な話や不思議な話が好きで、不思議ブリティッシュ･フォークの世界を旅する感じだ。トラッド曲が二曲ある。その内の一曲「神様、私は嵐の中で死にたくありません」{船津訳}は、June Tabor のトラッド的ムードにどきっとさせられもする。Produced by Stu Hanna。2013 作。Navigator)

*TONY REIDY:Round Tower Blues A

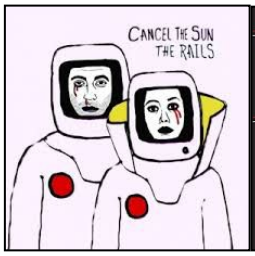
(世の中可笑しなおっさん SSW がいるもんだ。バンジョー、マンドリン、ギターを取っ替え引き替え、時に多重録音をしてうたう、この Tony のうたは何ともほっこり。Michael Hurley に似た雰囲気もあることはあるが、このおっさん Tony は物言わぬものに語りかけるように波静かで穏やかで、その眼差しは優しい。唄は飄々感はあるものの Johnny Duhan のような唄の響きだから、唄それ自体が心地よい。2015 作。Tony Reidy)

*LIZZIE NUNNERY:Company Of Ghosts A

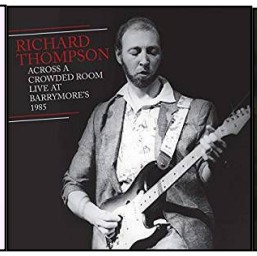
(2008 年 BBC ラジオの"Best Newcomer"賞受の女性 SSW の Lizzy Nunnery のデビュー･アルバム。Lizzie の唄は独特で、夢見る少女のような遊び心があって、何とも愛らしく心にこやか。2010 作。Fellside)

*JENNA:Brother A
(発売時21歳の女性SSWのJennaの二枚目。21歳の娘らしい恋や失恋のほか見聞きし、体験したことを多感な感性でスケッチした青春物語が、ある時はギターの強いビートの利いた曲調で、ある時はピアノをフィーチャーした流麗な曲調で、ある時はタイトなフォーク・ロック調で自在にうたう。魅力溢れる女性SSWだ。2009作。Hands On Music)

[CD/FAIRPORT&ALBION FAMILY]



(Rails)



(Richard Thompson)



(Fairport Convention)

*THE RAILS:Cancel The Sun B
(Richard & Linda Thompsonの娘のKami ThompsonとKamiの夫でPretendersのギタリストでシンガーのJames Walbourneの二人組"Rails"の新作。何だこりゃ。Richard Thompsonの影響が見え隠れする何ともゴージャスなフォーク・ロック。Jamesのエレキギターは R.T.とはタイプが異なるが、かっこよさとエネルギッシュさでは通じるところがあって、むしろその違いが彼らの個性と魅力になっている。加えて、Kamiと同じくSSWでもあるJamesのヴォーカルは唄に勢いがみなぎっていて、二人のヴォーカル・デュエットはRichard & Lindaの音楽的DNAを受け継ぎつつ、新時代のオリジナルなフォーク・ロックを果敢に体現している。今が旬。w.Carwyn Ellis{ﾍﾞｰｽ},Rob Walbourne{ﾄﾞﾗﾑｽ}。2019作。Psychonaut Sounds)
*RICHARD THOMPSON
:Across A Crowded Room Live At Barrymore's 1985 ¥2990
(1985年、カナダのオタワにあるBarrymore Music Hallで行われたR.Thompsonのライヴ。同年にビデオで発売された音源に新たに二曲を加え、二枚組CDで発売されたもの。1985年発売のスタジオ録音盤"Across A Crowded Room"のナムバーを中心に"I Want To See The Brights Tonight"や"Shoot Out The Lights"など全21トラック。バンド・メムバーはChristine Collister,Clive Gregson,Ruari McFarlane,Gerry Conway。そう言えばClive Gregson & Christine Collisterがバンド・メムバーだった時代があったなあ、と思いながら、ストイックにロックするRichard Thompson Bandの白熱のライヴに圧倒されっぱなし。1992年だったか、カナダのヴァンクーバーで観たRichard Thompson Bandの白熱のライヴを思い出した。観客は皆総立ち。1985年/2019作。Real Gone Music)
*FAIRPORT CONVENTION
:Farewell Farewell-40th Anniversary Edition A
(1979年のFairportのライヴ・アルバム"Farewell Farewell"の40周年記念アルバム。収録曲は"Farewell Farewell"に1979年のツアー音源曲2曲と1980年のシングル曲"Rubber Band"を加えた全14曲。メムバーはSimon Nicol,Dave Pegg,Dave Swarbrick,Bruce

Rowland の四名。当時は過去の名作と比較して過小評価していたが、今聴くと、今日のフォーク・ロック・バンド"Fairport"の活動停止＆再出発宣言のアルバムのように聞こえもする。過去の名曲を果敢にロックする音楽を聴いていると、Sandy Denny の声も聞こえてくるような気がする。1979 年/1980 年/2019 作。Edsel)

*FAIRPORT WITH SWARB:Scrum-Half Bricking D
(副題"Fairport With Swarb At Derby"。2003 年、Derby のアセンブリー・ルームに Dave Swarbrick を招いて、収録した D.Swarbrick 救援 1000 枚限定超レアなチャリティー CD。2003 作。Front Row)

*ALISTAIR HULETT & DAVE SWARBRICK
:The Cold Grey Light Of Dawn(1998 作。Musikfolk) C

*ROSIE CARSON & KEVIN DEMPSEY:Nightbirds A
(Dando Shaft、Whippersnapper の K.Dempsey とアイリッシュ系フォーク・シンガーでフィドル奏者の世代違いの男女のデュオ。Kevin は Rosie という花を得て、Kevin の美学を深めた独自のブリティッシュ・フォークを開花させていて、もううっとり。小春日和な日にのほほーんと聴いていたくなる。2014 年制作の 2016 リリース作。Haystack)

*ASHLEY HUTCHINGS BIG BEAT COMBO
:Twangin' 'n' A-traddin' Revisited A
(1994 年作の Big Beat Combo＝Ashley Hutchings,Richard Thompson,Simon Nicol,Maartin Allcock,Simon Care,Phil Beer 他＝の青春時代のﾎﾟｯﾌﾟ&ﾛｯｸ・ｱﾙﾊﾞﾑ"Twangin' 'n' A-traddin'"に三曲{内二曲は 60 年代風ｶﾞｰﾙｽﾞ・ﾄﾘｵの"Velveteens"がｳﾞｫｰｶﾙ}を加えた"Revisited"版。全 15ﾄﾗｯｸ。三つ折り紙ｼﾞｬｹ仕様。十代の頃の写真。1994/2015 作。Talking Elephant)

*ALBION CHRISTMAS BAND:One For The Road A
(2013 年、Albion Christmas Band{Ashley Hutchings,Simon Nicol,Kellie While,Simon Care}が結成 15 周年を記念して行ったツアーの中から、その年の 12/12 にロンドンの Kings Place でのライヴを収録したアルバム。全 19 トラック。清く美しい曲が多い英国的に美しいクリスマス音楽。2014 作。Rooksmere)

*FAIRPORT CONVENTION:Angel Delight(1971 作。Island) ¥1000

*FAIRPORT CONVENTION:Nine(1973 作。Island) ¥1000

*FAIRPORT CONVENTION:The Wood&The Fire ¥1000
(S.Nicol,C.Leslie,D.Pegg,R.Sanders,G.Conway から成る Fairport 1999 作。Woodworm)

*FAIRPORT CONVENTION:Before The Moon C
(1974 年の Ebbets Field でのライヴ。二枚組。20 トラック収録。2002 作。Pilot)

*FAIRPORT CONVENTION:The Cropredy Box D
(Cropredy の 30 周年ライヴ。３枚組。1998/2003 作。Sanctuary)

*FAIRPORT CONVENTION:Off The Desk D
(2 枚組。Ric Sanders 編集の 2004 年～2005 年のライヴ音源から全 22 曲。2006 作。Matty Grooves)

*SIMON NICOL:Consonant Please Carol ¥1000
(Simon Nicol の 1992 年作。"Rosemary's Sister"の作者 Huw Williams 作の曲を 4 曲を含む本作は、英国的叙情が深まっていて、しんみりと心に響く。名作。w.Martin Allcock,Gerry Conway,Danny Thompson,Maggie Reilly,Beryl Marriott,Grant Bowden,

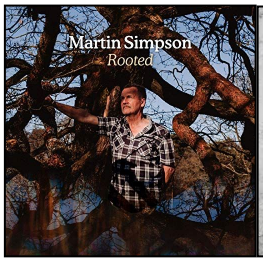
Sherryl&Sheila Parker,Pete Zorn。1992/2014 作。
Talking Elephant)

[LP+CD/ＥＮＧＬＡＮＤ]

*KATE RUSBY:Philosophers,Poets & Kings ¥3790
(Kate Rusby の新作で通算 17 枚目。ダブル･ジャケットの二枚組カラー{ピンク}LP＋CD の限定盤。Damien O'Kane のギターなどサウンドこそ新しめだが､Kate のシンギングは昔の Kate のような清純でしみじみ感のある味わいで胸キュン。"Bogey's Bonnie Belle"や"The Farmer's Toast"などの伝統歌や Fairport の "Crazy Man Michael"などを含む全 11 曲。2019 作。Pure)

*BELLOWHEAD:Matachin D
(イングランド屈指のトラッド･バンド"Bellowhead"のボーナス CD 付 LP 限定盤。2008 作。Navigator)

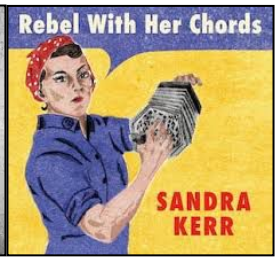
[CD/ＥＮＧＬＡＮＤ]



(Martin Simpson)



(Steeleye Span)



(Sandra Kerr)

*MARTIN SIMPSON:Rooted(Deluxe Edition) D
(Martin Simpson のギターをフィーチャーしたインスト曲 7 曲収録のボーナス CD 付のデラックス盤。Martin Simpson の新譜を聴くときはいつも身構えてしまう。本作は 1965 年に初めてギターを手にして音楽の道を歩み始めた頃から今までの長い音楽人生を振り返る内容で､いつもの英国的気品あるギターとシンギングは不変だが､ギターもヴォーカルも熟練フォーク･シンガーやブルース･シンガーのように円熟度が高く､何と言うか､身震いするほど味わいも感動も深い。主に Nancy Kerr{ﾌｨﾄﾞﾙ}と Andy Cutting{ｱｺ}と John Smith{ｴﾚｷｷﾞﾀｰ､ｳﾞｫｰｶﾙ}等が共演してはいるが､Martin の個性の中では､飾り程度にしか聞こえない。ボーナス CD は様々なタイプのギター＆バンジョーの演奏を繰り広げる。絶品としか言いようがない。名盤誕生。全 20 曲。Topic)

*STEELEYE SPAN:Est'd 1969 B
(結成 50 周年！何たる素晴らしさ！元 Steeleye メムバーの John Kirkpatrick の息子の Benji Kirkpatrick を新メムバーに迎えて二姫五太郎の七人編成になった Steeleye の新たな旅立ちを宣言する意欲作だ。考えてみれば､出すアルバム､出すアルバムが意欲作ばかりで､常に Steeleye スタイルの英国の香りを放つフォーク･ロックに息をのんできたが､本作は総合力で圧巻。ドラムスの Liam Genockey 以外は皆唄も達者で､上昇志向の見事なフォーク･ロックと共に､Maddy のヴォーカルをフィーチャーした三曲を含めて､コーラス力が充実の度合いを高めていて､恐ろしくカッコイイ。気分が舞い上がった最後は､Maddy の娘の Rose-Ellen Kemp 作の"Reclaimed"を無伴奏アカペラでうたって､静かに幕。二曲目のバラッド"Old Matron"では Jethro Tull の Ian Anderson が

Steeleye の一員となって、あの音色のフルートでフォークしている。ところで Maddy Prior はお幾つ？2019 作。Park)

*SANDRA KERR:Rebels With Her Chords B

(自身のコンサーティーナの弾き語りに娘の Nancy Kerr がハーモニーで加わった自作曲"Young Girl Upon The Road"で始まるヴェテラン･フォーク･シンガーの Sandra Kerr の新作は、イングランド北東部の伝統音楽をベースにした Sandra 流に消化されたトラッド･スタイルで、トラッド曲や自作曲を N.Kerr & James Fagan 夫妻と一緒にホームメイド感覚で演唱する。その、例えば自宅の庭で生演奏するようなオープンな感覚がすこぶる気持ちよい。たまに余興っぽい演奏にまで発展しそうな曲もあるが、それもホームメイド感覚の良さ。Sandra のシンギングも、歌のおばさん{おばあさん?}っぽい柔らかなシンギングで気持ちが和らぐ。Nancy & James が Sandra の 70 歳の誕生日に贈ったという曲は、ばっちり Nancy & James 風で息をのむ。2019 作。Sandra Kerr)

*NANCY KERR & JAMES FAGAN
:An Evening with Nancy Kerr & James Fagan C

(N.Kerr と J.Fagan 夫妻のアルバムとしては９年振りの新作で、初ライヴ･アルバム。ライヴ地はハートフォードシャーとシェフィールドの二箇所。James が激しくかき鳴らすギターの伴奏で Nancy の毅然としたシンギングで幕開けし、続く Nancy の超然としたフィドルと James の熱いギターの伴奏で、二人の毅然としたシンギングが疾走する二曲目と二人のテンションの高さとスリリングな演奏に息をのむ。息をのませて一気に頂点に達したあとからが本作のお楽しみ。二人はソロとデュエットで、悲喜交々な唄を味わわせてくれるが、幕開けの二曲が「天国」だった分、そのあとの心のこもった唄たちの味わいが深い。今更だが、Nancy も James もトラッドをうたうために生まれたかのような理想的なシンギングと音楽が満喫できて、実際にライヴショーを観てるかのような気分になるライヴ･アルバムだ。全 15 トラック。2019 作。Little Dish)

*THOM ASHWORTH:Head Canon B

(Folk Radio は「現代の Martin Carthy」と絶賛するイングランドの若きトラッド･シンガーの Thom Ashworth の比類なき新作。ベースギター奏者でギター系楽器の奏者でもあるが、ベースギターの低音とドラムスが地響きを起こし、毅然としたシンギングが素晴らしいトラッドの名曲"High Germany"で幕開けする本作は、Thom の揺るぎないシンギング、それも原野に立ち、遙か彼方に向かってシンギングするかのような見事なシンギングに骨抜きにされる。渋いフィドルの伴奏であろうが、無伴奏であろうが、またフォークロック調であろうが縦横無尽。若いが、器が大きい上に、トラッドをうたう唄心と独自のセンスに基づく自由な表現力は、他の英国フォーク/トラッド･シンガーを凌ぐ。名作誕生。2019 作。Thom Ashworth)

*COE,PETERS & SMYTH:The Road To Peterloo B

(Pete Coe{ヴォーカル、ブズーキ、メローディオン} と Brian Peters{ヴォーカル、メローディオン、コンサーティーナ、ギター、フィドル} と Laura Smith & Ted Kemp の Laura Smyth{ヴォーカル、チェロ、コンサーティーナ} のトリオによる新作。1819 年 8 月 16 日にマンチェスター起こった「ピータールーの虐殺」{広場で選挙法改正を求めて集会を開 いていた群衆に騎兵隊が突入して鎮圧

を図り、多数の死傷者が出る惨事となった(Wikipedia)}。当時、この事件にまつわるブロードサイド･バラッドが多数発行されたという。イングランドを代表するトラッド･シンガーの三名はバラッドの中から厳選したバラッドを、Pete と Brian はイングランドのトラッド･シンギングの模範を示すような気概あるシンギングで、Laura は Maddy Prior 風ながら、より語り部的にトラッド寄りの毅然として気高いシンギングで音楽で、生き生きと演唱する。各シンガーのイングランドのトラッド･シンギングの基本に立ち返ったシンギングが何とも感動的。英国トラッド･ファンが帰るべき音楽。今年の英国トラッドのベスト･アルバム確定。2019 作。Backshift Music)

*PETE COE:The Man In The Red Van B

(2017 年リリースの Pete Coe のソロ･アルバム。全 10 曲中 6 曲が"Banks of Red Roses"や"World of Misery{Shenandoah}"などの伝統歌＆バラッドで２曲が自作曲と他作曲が２曲。一曲一曲、バンジョー、メローディオン、ブズーキ、ギター、ダルシマーをとっかえひっかえし、それらの楽器の伴奏で、Pete は朗々とシンギングする。真っ直ぐに唄心に溢れている。クレジットには多数のゲスト･ミュージシャンの名が列記されているが、ドラムスとコーラスが加わった６曲目の"The Wall Of Troy"以外は、弾き語りと言ってよいスタイル。2017 作。Backshift Music)

*PETE COE:In Paper Houses(2004 作。Backshift Music) B

*PETE COE:Backbone(2010 作。Backshift Music) B

*THE DOVETAIL TRIO:Bold Champions B

(Rosie Hood{ｳﾞｫｰｶﾙ}、Jamie Roberts{Gilmore & Roberts の Roberts/ｳﾞｫｰｶﾙ､ｷﾞﾀｰ}、Matt Quinn{ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ､ｳﾞｫｰｶﾙ}の一姫二太郎のイングランドのトラッド･ユニットの Dovetail Trio の新作で二枚目。イングランドのトラッドの伝統的スタイルに立ち返るようなトリオのシンギングとサウンドに気分リフレッシュし、心洗われる。彼らが模範とするスタイルは Copper Family～Young Tradition だが、加えて Rosie のシンギングと醸し出される音楽は Shirley Collins 風な味わいも放っている。そんな彼らのシンギングを Matt Quinn のカントリー･ダンスな？コンサーティーナがよくもり立てている。イングランドのトラッド･ファンなら拝みたくなるような孤高の美しきトラッドだ。お客さま情報によれば Matt Quinn は以前 Flowers & Frolics や Gas Mark 5 でメローディオンを弾いていた Dan Quinn の息子のようです。2019 作。GR)

*BEN WALKER:Echo B

(ベスト･アコースティック･ギタリストの一人と賞賛されているギタリストの本デビュー･ソロ･アルバムは、Hazel Askew,Bella Hardy,Kitty Macfarlane,Laura Ward,Thom Ashworth,Laura Hockenhull{初耳のこの女性シンガー、凄い},Jinnwoo それにクレジットなしの古老などのシンガーをフィーチャーした驚くほど美麗なブリティッシュ･フォーク･アルバム。粒立ちの良い流麗なアコースティック･ギターを伴った各シンガーの唄は、各シンガーのどのレコーディング曲よりも輝いて聞こえ、息をのむ。シンガーは一曲一曲で入れ替わるが、アルバムとして統一感が感じられるのは、絶え間なく流れる Ben の英国的気品を帯びた流麗なギター･サウンドの効果か。音楽の深さも深い。心洗われる逸品。2019 作。Folk Room)

*KATHRYN TICKELL & THE DARKENING:Hollowbone B
(Kathryn Tickell の本作はユネスコ文化遺産にも登録されているイングランド北部、スコットランドとの境界線近くに築かれたローマ帝国最北端の国境線のハドリアヌスの長城から発掘された古代の楽器"Hollowbone"に触発されて制作した挑発的で斬新な先鋭ノーサンバーランド音楽で、そのピュアーな想像力故のエネルギーはプログレッシヴ・トラッドとでも呼びたいほど。音楽のレンジもアラブ風音楽の域にも達しようかと思えるほど。伝統音楽をベースに想像力を限りなく膨らませた音楽は圧巻。2019 作。Magnetic North East)
*RUTH NOTMAN & SAM KELLY:Changeable Heart B
(10 年振りの Ruth Notman の三枚目に当たる新作。今回はアイルランド系英国人シンガーでマルチ楽器奏者の Sam Kelly とのデュオ・アルバム。仕掛け人は Kate Rusby のご主人で、本作のプロデューサーの Damien O'Kane。二人に望んだのはおそらく、フォークやトラッドの名曲それ自体が持つプリミティヴな味わいを壊さずにうたうこと。そう言う意味では、Ruth の 2007 年のデビュー作"Thread"と通じる音楽性を保持していて、"Thread"の延長線上の素朴だが極上の男女のデュエット版として結実している。Ruth の素朴なシンギングはデビュー時頃の Kate Rusby のシンギングを想起させもする。2019 作。Pure)
*THE TRANSPORTS "A Tale Of Exile And Migration" A
(Peter Bellamy の伝説的名作"The Transports"{オーストラリアへの囚人の搬送の歴史的実話をもとに制作されたバラッド・オペラ}から 40 年。その"The Transports"を新たなラインナップで、再演したもの。新たなラインナップは、The Young'uns{Sean Cooney ,David Eagle,Michael Hughes},Faustus{Benji Kirkpatrick, Saul Rose,Paul Sartin}に Nancy Kerr,Rachael McShane,Greg Russell,Matthew Crampton の、トラッド第二世代の精鋭達十名。Nancy Kerr と Rachael McShane の歌姫二人のシンギングが光っている。全 28 トラック。2018 作。Hudson)
*BROOM BEZZUMS:Winterman A
(Broom Bezzum は Andrew Cadie と Mark Bloomer の二人組。本作は三枚目。驚くのは二人の英国トラッド/フォークの気品と気高さに充ちたヴォーカルとギターとフィドル。その質の高さは、初期の Spiers&Boden と肩を並べる。大半の曲で Katie Doherty がヴォーカルで加わっていて＋αの魅力の英国トラッド/フォークで魅了する。Andy May のノーサンブリアン・パイプスが加わった８曲目がこれまた圧巻。本作は冬とｸﾘｽﾏｽの伝統曲集。2012 作。Steeplejack Music)
*LEVERET:Inventions A
(Andy Cutting{ｱｺ､ﾒﾛｰﾃﾞｨｵﾝ}､Rob Harbron{ｺﾝｻｰ ﾃｨｰﾅ}そして Tom Sweeney{ｳﾞｧｲｵﾘﾝ､ｳﾞｨｵﾗ}の Leveret の 2017 年作。本作はスタジ・ライヴで、イングランド的な気品とロマンティックさが音楽の根っこに感じられる気持ちの良い音楽。それは Andy Cutting が 1990 年代初めに Chris Wood と組んで創作した音楽のような心の深いところで感動する音楽。曲目はモリス・ダンスの曲調だったり、トラッドの曲調だが、好きな散歩コースを曲にした曲や友達に捧げた曲や好きな曲からひらめいて作った曲等、風景が浮かぶような一曲一曲は、気流のように連なって躍り舞う。2017 作。

Rootbeat)

*GREG RUSSELL:Inclined To Be Red B

(Greg Russell&Ciaran Algar のシンガー＆ギター奏者の Greg のソロ。ブリティッシュ･フォークなキリッとしたギターの弾き語りを要にした Greg のシンギングの何と格調高いこと！伝統歌三曲や Dick Gaughan の名唱で知られる"The Star Of The County Down"の替え歌"Crooked Jack"や自作の唄四曲などを実直にうたい通している。身震いの傑作。w.Archie Churchill-Moss{ｱｺ}, Tim Yates{ﾀﾞﾌﾞﾙﾍﾞｰｽ}。2017 作。Fellside)

*CIARAN ALGAR:The Final Waltz B

(2013 年に BBC2 の"Young Folk Award"賞受賞の Greg Russell& Ciaran Algar の天才アイリッシュ･フィドラーの Ciaran のソロ･デビュー作。2015 作。Fellside)

*BOB AND GILL BERRY:Echoes Of Alfredy B

(｢暖炉のそばでうたって楽しむ｣イメージで制作されたという Bob & Gill 夫妻の新作は、オックスフォードシャーのフォークソング収集家の Alfred Williams{1877-1930}が収集した民謡を中心に演唱したアルバムで、二人のシンギングといい、二人やゲストによるモリス･ダンス風音楽、それに土臭い英国トラッド･サウンドといい、イングランドのオーセンティックなトラッドの味わいと楽しさが自然体で溢れたアルバム。全 16 曲。2018 作。WildGoose)

*MISCHIEF AFOOT:Mischief Afoot B

(コッツウォルズを拠点に活動する Mischief Afoot は、Becky Dellow{ﾌｨﾄﾞﾙ}, John Davis{ﾘｺｰﾀﾞｰ、ﾊﾞｳﾛﾝ}, Jeff Gillett{ｳﾞｫｰｶﾙ、ｷﾞﾀｰ、ﾏﾝﾄﾞｰﾗ、ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ、}のトリオ。選曲はイングランド、アイルランド、スコットランドのトラッドやその関係のミュージシャンの曲。彼らの手にかかれば、アイリッシュであろうとイングリジャケ写のように悪がしっこい妖精になって？楽しむトラッドが楽しい。全 14 曲。2018 作。WildGoose)

*BOB FOX & JOHN TAMS:A Garland For Joey B

(副題"The War Horse Songbook"。｢ウォー・ホース～戦火の馬～｣は、1982 年に出版されたマイケル・モーパーゴによる児童小説を舞台化した演劇で、スティーヴン･スピルバーグ監督により映画化もされているが、本作は演劇のために John Tams がトラッドのスタイルで作詞作曲した唄の中からハイライトの唄を Bob Fox がギターの弾き語りでうたったアルバム。驚くのは、Bob Fox の 60 歳半ばを過ぎてもなお、70～80 年代に Stu Luckley とのデュオで味わわせた英国トラッド調に毅然として、円やかにコブシの利いたシンギングと、ドキッとするほど、70 年代英国トラッドの空気に充ちたきららかなギターの音色を発していて、味わい深い。全 12 曲。2017 作。Fledg'ling)

*WHAPWEASEL:Skirl Naked A

(1998 年作の１枚目。Dave Ainsley のメローディオンを中心によくまとまった五人組エレクトリック･カントリー･ダンス･バンド。Old Swan Band と Tiger Moth を混ぜたような印象。Produced by Rick Kemp。Whapweasel)

*WHAPWEASEL:Burn A

(サックスの Fiona と Stuart が加入し７人組になった Whapweasel の 2000 年作。Produced by Rick Kemp。Whapweasel)

*DAMIEN BARBER & MIKE WILSON:Under The Influence B

(販売した記憶のない CD が棚の隅っこから出てきて、聴いてみたら、おっそろしく見事なイングランドのトラッド･シンギング･アルバムで驚いてしまった。LP 盤風の装丁や、Peter Bellamy や Dick Gaughan や Martin Carthy や Harry Cox や Iwan MacColl 等の LP ジャケットや写真を使ったジャケットから Damien{ヴォーカル、コンサーティーナ、ギター}と Mike{ヴォーカル}の二人が目指す音楽が推し量られるが、二人のシンギングもギターもコンサーティーナも信じられないほど「70 年代トラッド」していてファンは恍惚必至。気分は正にお宝発掘。2009 作。Sources)

*THE BALLADS OF CHILD MIGRATION A

(副題"Songs For Britain's Child Migrants"。1869 年から 1970 年の間に、約１０万人の英国人の子どもが親なしで海外に移住したという。その内の約９万人がカナダだったという。本作はフォーク/トラッドのミュージシャン達が移民していった子ども達の唄を作詞作曲し、うたったもの。この企画に賛同したミュージシャンは、Chris While&Julie Matthews{4 曲}, Jez Lowe{4 曲}, John Doyle{1 曲}, Coope Boyes&Simpson{2 曲}, John McCusker{フィドル演奏。1 曲}, Boo Hewerdine{2 曲}, Belinda O'Hooley&Heidi Tidow {2 曲}。w. Andy Cutting, Ian Carr, Michael McGoldric, etc. CD ブック型 CD。2015 作。Delphonic)

*ROBIN DRANSFIELD:A Lighter Touch ¥2800

("Tidewave"と 1972 年の未発表音源ライヴの二枚組。全２５トラック"。2008 年。Hux)

*BARRY DRANSFIELD:Be Your Own Man(1994 作。Rhiannon) D

[CD/ＷＡＬＥＳ]

*JENNY SORRENTI:Medieval Zone C

(ウエールズ人の母とイタリア{ナポリ}人の父を持つ Jenny の 2001 年作。本作は彼女らしい地中海音楽、地中海古層の音楽、汎ケルト音楽の幽艶な香り高い音楽。ケルト的かつ地中海的なサウンドが織り成す幻想的で優美なサウンドに包まれた Jenny のヴォーカルは夢幻的でスピリチュアル。名盤。2001 作。Celtica Napoletana)

*BLODAU GWYLLTION:Llifo Fel Oed B

(Blodau Gwyllton は小説家で女性 SSW の Manon Steffan Ros とギター奏者の Elwyn Williams の二人組。全曲ウエールズ語で、母親がうたっていたというトラッド曲一曲以外は全曲 Manon の自作曲。赤子を寝かせ付けるようにそっと優しくうたう Manon の唄も、Elwyn の繊細で穏やかなアコースティック･ギターの響きも、この世の物とは思えない穏やかで普遍性が感じられる響きがあって、ほんわかと心和んでしまう不思議に心地よい音楽。2018 作。Gwymon)

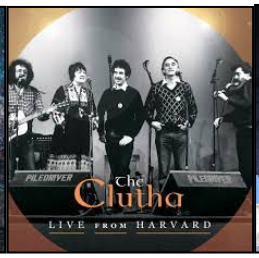
*AR LOG:Saith VII B

(Ar Log の通算 11 枚目。2016 年には結成 40 周年記念ツアーで、21 カ国でコンサートをしたという。結成 40 周年の祝宴の気分は本作にばっちり注入されていて、シンギングもウエールズ独特な男性コーラスも、二台のハープ、二台のフィドル、二台のギター、ピアノ
による演奏も、彼らが創り上げたウエールズのトラッドのスタイル音楽が響き合っていて、また泣ける曲も含めて慶びの気分に充ちていて、幸せな気分。2018 作。Sain)

［CD/ＳＣＯＴＬＡＮＤ］



(Breabach)



(Clutha)



(Karine Polwart)

*BREABACH:Frenzy Of The Meeting C

(Calum MacCrimmon{ヴォーカル、バグパイプ、ホイッスル他},Ewan Robertson{ヴォーカル、アコースティック&エレキギター他},James Lindsay{ダブルベース、エレキギター、ヴォーカル},James Duncan Mackenzie{バグパイプ、フルート、ホイッスル}そして紅一点のシンガー兼フィドル奏者の Megan Henderson の一姫四太郎のスコティッシュ・トラッド・バンドの Breabach の新作。バグパイプと笛とフィドルを中心にした風吹くサウンドは、アイルランドの Flook を想起させもするが、パイプがフィーチャーされていて、当然のことながらスコティッシュの曲調だから、スコティッシュ色濃厚で、加えて演奏力抜群と来るから感動の度合いが高い。さらに加えて、ゲール語の曲二曲を含む Megan 嬢の清楚で凛としたシンギングは息をのむ。Breabach ってこんなに良かったっけ？現在活動中のトラッド系スコティッシュ・バンドの中で、総合力でピカーのバンド。2019 作。Breabach)

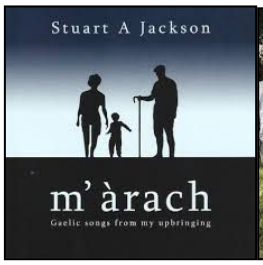
*CLUTHA:Live From Harvard B

(今年の三月に亡くなったスコットランド屈指のトラッド・シンガーの Gordeanna McCulloch を擁したスコットランドのトラッド・グループ"Clutha"の 1981 年のライヴが発売された。Gordeanna は 1970 年代に Topic などから数枚のアルバムを発表している。メムバーは Gordeanna に Ronnie Alexander{2017 年に他界。ギター、ヴォーカル}、Erlend Voy{フィドル、コンサーティーナ、ヴォーカル}、Callum Allan{フィドル}、Tom Johnstone{各種バグパイプ}の五名。Silly Wizard や Boys Of The Lough ほどの知名度はなかったが、当時、Jeannie Robertson や Belle Stewart のようなバラッド・シンガーと肩を並べるシンガーと評された Gordeanna のシンギングともう一人のリード・シンガーの Ronnie によるシンギングを含めて、スコティッシュ・バンドとして既にスコテイッシュ・トラッドの完成形を体現していて、改めて彼らの偉大さを思い知らされる。2019 作。The Clutha)

*KARINE POLWART:Scottish Songbook(Deluxe Edition) ¥2690

(豪華ハードカバー装丁の Deluxe Edition 版。Karine Polwart の新作はトラッド・アルバムではない。Gerry Rafferty や Simon Nicol や John Martyn 等のフォーク系 SSW のナムバー{Karine が言うところのスコティッシュ・ポップの珠玉曲}を Karine 流に創作したもので、彼女にとってトラッドもスコティッシュ・ポップも創作するのに違いはないとのこと。トラッドであろうと SSW のナムバーであろうと、一曲目 Waterboys の Mike Scott 作の"The Whole Of The Moon"が流れ出すや、「どうしてこんなにかっこよく素敵にうえるんだろう」と、ワクワク気分ににさせる感情移入が見事ないつもの Karine 節に一気に彼女独特な音楽の世界へと誘われる。トラッド離れした近年の二作の経験が活きた柔軟な表現力と柔軟な音作りにも舌鼓を打たされる。全 11 曲。Hegri Music)

*KARINE POLWART:A Pocket of Wind Resistance B
(元 Malinky のヴォーカルで、スコットランドを代表する女性フォーク・シンガーの K.Polwart の 2017 年作。本作は毎年 9 月にアイスランドやグリーンランドの海食崖からスコットランドのフォース湾を通ってファラ・フロー・ロック湖に渡ってくる雁の群れへの思いを中心に自然環境保護への思いを唄にしたもの。美しく、夢のような音楽。2017 作。Hudson)
*KARINE POLWART:This Earthly Spell(2008 作。Hegri Music) A







(Stuart A Jackson) (TMSA Young Trad) (Runrig)

*STUART A JACKSON:M'arach B
(副題"Gaelic Songs From My Upbringing"。スコットランド西部のモバーン出身の若きゲール語シンガーの Stuart A Jackson のデビュー作。Stuart は両親{父親はアコ奏者で母親はシンガー}の影響で地元のフォーク・ミュージックにどっぷりと親しんで育ったという。プロデューサーの Mary Ann Kennedy は Stuart のゲール語シンガーとしての素の魅力を出来るだけ活かすプロデュースに徹していて、穏やかなスコティッシュ・サウンドを伴った Stuart の柔和で初々しいシンギングは、何十年も前に Arthur Cormack のゲール語トラッド・アルバムを初めて聴いたときの感動を思い起こさせる。今どき稀有のピュアーで美しい男性ゲール語シンギング・アルバムだ。ブックレットには家族との多数の思い出の写真が掲載されている。w.Mary Ann Kennedy,Nick Turner,Archie McAllister,Ross Wilson,Finlay Wells,Angus MacColl,etc. 2019 作。Clachan Music)
*TMSA YOUNG TRAD TOUR 2018 B
(9/20 入荷予定。BBC Radio Scotland Young Traditional Musicianof the Year のコンテストの優勝者と入賞者等で結成されたグループによる 2018 年版。2018 年版グループは 2018 年ヴォーカル部門優勝者の Hannah Rarity に,Charlie Stewart{ﾌｨﾄﾞﾙ},Ali Levack{ﾎｲｯｽﾙ､ﾊﾞｸﾞﾊﾟｲﾌﾟ},Rory Matheson{ﾋﾟｱﾉ},Luc McNally{ｷﾞﾀｰ､ｳﾞｫｰｶﾙ},Amy Papiransky{ｳﾞｫｲｽ}､David Shedden{ﾊﾞｸﾞﾊﾟｲﾌﾟ}。Hannah Rarity ファンは聞き逃せないないでしょうね。2019 作。TMSA)
*RUNRIG:The Last Dance - Farewell Concert At Stirling D
(2018 年 8 月に Runrig の活動 45 年を記念して行われた Farewell Concert のライヴ三枚組ボックスセット。全 31 曲。Runrig も偉大になったものだと感心してしまう横綱級スコティッシュ・フォーク・ロックのオンパレード。気分晴れ晴れ。ゲスト:Julie Fowlis。2019 作。Sony Music)
*RUNRIG:In Search Of Angels a
(この時代の Runrig も最高。70 年代の西海岸ロックくらいかっこいいスコティッシュ・フォーク・ロック。1999 作。Sony Music)
*RUNRIG:The Essential Runrig a

(1979 年から 1996 年までの音源からの 16 曲収録コンピレション。
2007 作。Capitol)
*DONNIE MUNRO:Fields Of The Young a
(元 Runrig のヴォーカルのライヴ音源多数含む 16 収録コンピレシ
ョン。2004 作。Hypertension)
*NORTHERN FLYWAY:Northern Flyway A
(Northern Flyway はシェトランド生まれのシンガーでマルチ楽器
演奏家の Inge Thomson とシンガーで SSW で鳥類生物学者の Jenny
Sturgeon と SSW でマルチ楽器演奏家の三人の女性アーティストを
フィーチャーした鳥保護音楽プロジェクト。鳥の鳴き声も取り込
んだ本作は、同じレーベルから発売された Karine Polwart{Inge
Thomson は K.Polwart Band のメムバー}の自然環境保護への思い
を込めた"A Pocket Of Wind Resistance"と通底する夢のように
清々しいフォーク・アルバム。彼女等の音楽が素晴らしいのは、シ
ンガー自身の心が鳥になっていて、シンギングは風に乗って飛翔
し、それらのシンギングはフォークのスタイルであること。類い
稀な美しいフォークとして傑出している。部屋の空気も清々しく
一変する。2018 作。Hudson)
*DICK GAUGHAN:The Harvest Tapes A
(Dick Gaughan の新譜。副題"The Definitive Gaughan Concert
From 1982"。2016 年に脳卒中を起し、療養生活をしてきた Dick
Gaughan は順調に回復をし、昨年から音楽活動を再開。本作は名盤
"Handful Of Earth"の翌年の 1982 年に、Dick Gaughan が米国マサ
チューセッツにある Old Cambridge Baptist Church で行ったラ
イヴ 10 トラック{12 曲}と未発表音源曲 3 トラックを加えた 13 トラ
ック{15 曲}を収録したアルバム。37 年前の D.Gaughan の弾き語り
ライヴは、正に正座して「拝聴」したくなるほど、見事な Gaughan
節に身震いさせられる。10 トラック目の"The Freedom Come All
Ye"では、このコンサートに出演していた Johnny Cunningham が
泣きのフィドルを奏でていて、Gaughan 節の味わいをより豊かに
している。ブックレットには白鬚をたくわえた今の Gaughan が愛
犬と撮った写真が拝める。2019 作。Greentrax)
*ALEXANDER MCCALL SMITH & JAMES ROSS
:These Are The Hands A
(作家のアレグザンダー・マコール・スミスがスコットランドの過
去と現在の海にまつわる出来事や話などを綴った詩にピアニス
トの James Ross がスコットランドのトラッドのスタイルで曲を
付け、元 Cherish The Ladies の Michelle Burke とスコットランド
のヴェテラン・トラッド・シンガーの Kathleen MacInnes の二人が
ソロで、あるいはデュエットしたアルバム。二人のシンガーは感
情移入が豊かで、かつ James Ross のスコティッシュ流ピアノの表
現力が豊かで、大衆的なスコティッシュ・ソングとして感動の深
さが深い。w.Patsy Reid,Ryan Young,Liam Bradley,etc.
2019 作。Greentrax)
*MARY ANN KENNEDY:Glaschu A
("Gaelic Singer of The Year"賞を受賞した"An Dan"から二年。
伝統音楽一家育ちの生え抜きのトラッド・シンガーで、その分野
で指導的な役割を果たしている Mary Ann Kennedy の二枚目。本作
は Michael Marra などの唄全 16 曲をゲール語に置き換えて{ゲー
ル語歌詞は母親の Kenna}うたったアルバムで、伝統歌のスタイル

にのっとった曲調に聞こえる曲調とゲール語の響きを活かしきった凛とした美しいシンギングは、スコテイッシュ・シンギングに新たな息吹を注ぎ込んでいて感動的。Finlay Wells の清澄なアコースティック・ギターが冴え渡っている。P28 のブックレット付。2019 作。ARC)

*IAIN MacFARLANE & INGRID HENDERSON
:Cockerel In The Creel B
(Blazin' Fiddles のヴェテラン・フィドル奏者の Iain MacFarlane とヴェテラン女性ハープ奏者の Ingrid Henderson の夫婦によるフィドルとハープ又はフィドルとピアノのデュエットをベースにしたスコティッシュ・トラッド・アルバム。Iain はフィドルのみならずアコーディオンやホイッスルも演奏するが、二人の音楽はアットホームな音楽。演奏はスコティッシュ・トラッドのセンスが散りばめられていて、スコティッシュの香りを放つスッピンのサウンドが心地よい。音楽はシンプルだが、追い求めた末の珠玉かつ侘び寂びのスコティッシュ・サウンドを放っている。味と心で勝負の音楽。2019 作。Old Laundry Productions)

*TRAIL WEST:From The Sea To The City B
(四太郎から六太郎編成になったグラスゴーのフォーク・ロック・バンドの"Trail West"の三枚目。野趣な Ian Smith のヴォーカルはそれだけで希少価値だが、アコ、ホイッスル、ハイランド・バグパイプやアコースティック・ギターなどによるスコティッシュ・トラッド風味満点な音楽は、潔いロック・サウンドと合体して、独自の血湧き肉躍るおやじスコティッシュ・フォーク・ロックを体現している。2018 作。TW)

*WILLIAM JACKSON:Duan Albanach B
(Ossian の創設メムバーでスコットランド屈指のハープ奏者 William Jackson の 2003 年のアルバム。前半は自身のハープとティン・ホイッスルによる演奏集で、スコティッシュ・スタイルの粒立ちの良い見事なハープの音色は、耳の掃除をしてくれるほど美しく気高い。後半は Celtic Connections のライヴで、スコットランドの古代詩に触発されて作曲した曲集。Mackenzie Sisters に Iain MacDonald,Jerry O'Sullivan,Alasdair Fraser 等の精鋭達をゲストに迎えて、優美かつ空想的な音楽世界を創作する。Mill)

*THE SHEE:Murmurations B
(Rachel Newton{ヴォーカル、エレクトリック・ハープ、クラルサッハ},Lillias Kinsman-Blake{フルート},Shona Mooney{フィドル},Olivia Ross{ヴォーカル、フィドル、ヴィオラ},Laura Salter{ヴォーカル、マンドリン},Amy Thatcher{アコ}の女性六人組 Shee の 2012 年作。Shee の音楽は常にフレッシュ。彼女らはトラッドやケルト音楽をオリジナルなアレンジとサウンドで創作する。歌姫たちのシンギングがトラッド・シンガーとして最高レベルを維持し、躍動的で鮮烈。2012 作。Shee)

*CRUINN:Cruinn A
(スコットランドを代表するトラッド・シンガー四名{Rachel Walker,Fiona Mackenzie,James Graham そして Anam の Brian O hEadhra}によるソロやデュエットや四人のアカペラ等によるスコットランド・ゲール語によるシンギング・アルバムの名作。2013 作。Cuinn)

*COAST:The Turning Stone A

(Runrig クラスのフォークロック･バンド。Paul Eastham のヴォーカルも抜群。ゲスト:Duncan Chisholm。2011 作。Ruabhal)

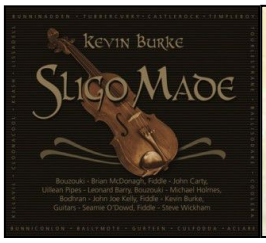
*OLD BLIND DOGS:Room With A View B

(オリジナル･メムバーは Jonny Hardie{ﾌｨﾄﾞﾙ､ｳﾞｫｰｶﾙ}のみとなった Old Blind Dogs の結成 25 周年記念アルバム。メムバーは､J. Hardie に Aaron Jones{ｳﾞｫｰｶﾙ､ﾌﾞｽﾞｰｷ他}､Ali Hutton{ﾊﾞｸﾞﾊﾟｲﾌﾟ､ﾎｲｯｽﾙ､ｳﾞｫｰｶﾙ}､Donald Hay{ﾊﾟｰｶｯｼｮﾝ､ｳﾞｫｰｶﾙ}。数々の名盤を世に送り出してきた Old Blind Dogs の名に恥じぬ横綱級スコティッシュ･トラッド。2017 作。OBDmusic)

*OLD BLIND DOGS:Close to The Bone(93 作。Lochshore) B

[CD/ＩＲＥＬＡＮＤ系]

デジパック･タイプを含め､元々開封されているものが多数あります。



(Kevin Burke)



(Martin Hayes &)



(Moya & Cormac)

*KEVIN BURKE:Sligo Made C

(9/23 入荷予定。7 月のある日､Kate Burke へのメッセージを誤って Kevin Burke に送ったら､誤送信の知らせとともに｢もうすぐスライゴーエリアの音楽友達と録音した新譜を出すよ｣教えてくれたその新譜"Sligo Made"が発売された。その音楽仲間達は､Dervish の Michael Holmes{ﾌﾞｽﾞｰｷ}と Brian McDonagh{ﾌﾞｽﾞｰｷ}､Flook の John Joe Kelly{ﾊﾞｳﾛﾝ}､Waterboys の Steve Wickham{ﾌｨﾄﾞﾙ}､John Carty{ﾌｨﾄﾞﾙ}､Leonard Barry{ｲﾘｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ}､Seamie O'Dowd{ｷﾞﾀｰ}の七人の侍。Kevin を含めればフィドル弾きが三名。米国ポートランド住まいの Kevin Burke の故郷に凱旋して創った新作､楽しみ！2019 作。Loftus Music)

*MARTIN HAYES & BROOKLYN RIDER:The Butterfly C

(9/18 入荷予定。Martin Hayes と Brooklyn Rider なる弦楽四重奏団のコラボ･アルバム。本作はお互いが 2009 年から交流をしてきたことを祝って 2016 年にニューヨークで収録されたもの。Martin Hayes のいつものフィドル演奏に終始し､Brooklyn Rider が四重の伴奏を付けた印象で､ちょっと豪華な Martin Hayes Music がナチュラルに生まれている。Brooklyn Rider の面々は得意のレパートリーから離れて､アイリッシュを Martin と楽しんでるように聞こえる。全 12 曲。2019 作。251 Records)

*MOYA BRENNAN･CORMAC DE BARRA:Timeless B

(Clannad の Moya がアイリッシュハープ奏者の Cormac De Barra と組むようになって制作したアルバムの三枚目。Moya が Cormac が爪弾くケルティックなハープの音色に自身が求める音楽の理想を感じ､Cormac の力を借りて Clannad 流のケルト風音楽を創り続けていることは､これまでの音楽を聴けば明らか。Cormac の演奏もヴォーカルも Moya の手中にあって､Moya の Clannad 流ケルト風音楽の純度を増すことに大きく寄与している。いわば Clannad がデビュー時か

ら内包していたケルト的な幽玄さを Moya なりに追求し、緩く結実させた、アルバム・タイトル通り、Timeless{永遠}な感覚に襲われる Moya Brennan の魂の音楽。Martin Tourish や Eamonn De Barra ほか多数のミュージシャンが参加しているが、全て Moya 色のサウンド。聴く人を Timeless な夢の世界へと誘う。2019 作。Beo)







(Dermot,Eamonn,John)　　(Goitse)　　(Birkin Tree)

*DERMOT BYRNE,EAMONN COYNE,JOHN DOYLE:Liag　　B

(何の説明も要らぬ三太郎による本作は、ドニゴール南西部の音楽に焦点を当てた主にアコとバンジョーとギター＆ブズーキによるセッションと John Doyle のシンギングが収められたアルバム。収録曲は他の地域の音楽を含めて広くドニゴール南西部関連の、多くはマニアックな曲だが、三人はマニアの目線で見つけた曲を珠玉のアイリッシュへとグレイドアップする。Dermot のアコと John のギター&ブズーキに Eamonn のバンジョーが加わったことで、音楽にローカル色というか、ぬくもり感が生まれている。絶好調な音楽の中で、Dermot が娘の Nua のために作ったという"Nua's Barndance"や John Doyle がドニゴール人移民の話を聞いて作ったという Andy Irvine 風の節回しの"Duffy's Cut:Mile 59"などは気分をほぐしてくれる。本作は亡き Tommy Peoples の霊に捧げられている。ちなみにアルバム・タイトルはドニゴールの大西洋岸にある断崖絶壁の山"Sliabh Liag"{スリーブリーグ}の名から採られている。2019 作。Dermot Byrne,Eamonn Coyne,John Doyle)

*GOITSE:Ur　　C

(Áine McGeeney がヴォーカルの一姫四太郎の五人組アイリッシュ・バンドの Goitse の三年振りの新作！通算五枚目。Áine McGeeney の高音の軽やかで佳麗なシンギングは、Karan Casey のシンギングに透明感が加わった感触で相変わらず抜群だし、新メムバーにバンジョー＆ブズーキの Alan Reid が加わったものの、バンジョー、バウロン、フィドル、アコーディオン、ギター、ホイッスルなどによる路上演奏しているような生き生きとしたアイリッシュ自体には変わりがなく、前作同様、演奏に遊び心というかひと工夫あって、結果的に他のバンドにはないひと味違う演奏を奏で出していてお見事。それらのセンスはおそらく、ライヴ活動をする中で身につけた聴き手を楽しませるひと味違う音楽なのだろう。どの楽器もよく弾み、よく響き、よくうたう。2015 年に"Trad group of the Year"賞を受賞している。2019 作。Goitse Music)

*BIRKIN TREE:Five Seasons　　B

(イタリアのアイリッシュ・ミュージック・バンドの Birking Tree の驚きの新作だ。全曲でパイプ奏者の Mick O'Brien の娘で RTE RnaG フィドル・コンペティションで優勝経験のあるフィドル奏者の Aoife Ní Bhriain がバンドの一員となって、いやむしろリーダーシップを発揮して演奏して制作されたもので、フィドルをメインにしてフルート、ホイッスル、イリアンパイプス、ギターなどのセ

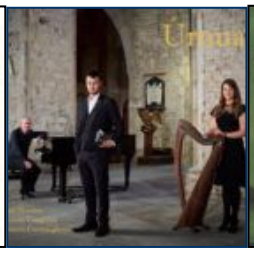
ッションから生み出されるアイリッシュの何とハイレベルなこと！ダンス曲ではハイレベルなセッションを繰り広げ、エアー曲では感情のこもった演奏で心底酔わせる。加えて、新加入のヴォーカルのLaura Torteirolo嬢のアイリッシュ・スタイルの佳麗なシンギングが滅茶苦茶素晴らしく、息をのむ。もう完璧にトップクラスのアイリッシュ。ラストを飾るハープ奏者がゲスト参加の"Molly Malone"{Traditional}の美しさは言葉では言えない。2019作。Felmay)

*BIRKIN TREE:Virginia B

(Martin Hayes & Dennis Cahillがゲスト参加のBirkin Treeの2010年のアルバム。2010作。Felmay)









(Sibeal) (Leonard,Declan,Shane) (Carl,Francis&Eimear) (Patsy Moloney)

*SIBEAL:Sibéal ¥2390

(ゲールタハトで育ったという若き女性シャンノース・スタイルのシンガーのSibéal Ní Chasaideの息をのむデビュー作。アイルランドのUniversal Musicからのリリースで、一般的なフォーク・ミュージックとは一線を画す高品質感のあるケルティック・ムードの厳かな音作りが成されていて、趣味ギリギリのサウンドだが、彼女のシンギングを聴くや、彼女の悠久感あるシャンノース・スタイルのシンギングに心奪われてしまう。曲目はアイリッシュの名曲がずらりと並ぶが、ゲール語であろうと英語であろうと、聴き親しんだ唄が異次元の唄として心に響いてくる。w.Steve Cooney,Tommy Hayes,Briocan Bairead,Geraldine O Doherty,Gucci Gelald Peregrine,Niadh & Roisin Ní Chasaide。2019作。Universal)

*LEONARD BARRY,DECLAN FOLAN,SHANE McGOWAN

:Hurry The Jug ¥2390

(スライゴを拠点に活動するLeonard Barry{ｲﾘｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ、ﾎｲｯｽﾙ}、Declan Folan{ﾌｨﾄﾞﾙ}、Shane McGowan{ｷﾞﾀｰ}のトリオによる新作。改めて「イリアンパイプスとフィドルはよく合うなあ」と惚れ惚れとしてしまうLeonardとDeclanの阿吽の演奏にShaneのダイナミックかつかゆいところに手の届く繊細なギターが重なる。このリズム楽器を超えたShaneのアイリッシュ・ギターがトリオのアイリッシュの質をグッと上げている。それぞれの楽器の良さというか味わいがよく表出されていて、特にアイリッシュ・スピリットみなぎるLeonardのイリアンパイプスはメチャ素晴らしい。そして一曲だけだがホイッスルも。2019作。Barry,Folan,McGowan)

*CARL HESSION,FRANCIS CUNNINGHAM & EIMEAR COUGHLAN

:Úrnua C

(Paddy Cannyの孫でアイリッシュハープ＆フィドル奏者のEimear Coughlanと Eimearの演奏仲間でコンサーティーナ奏者Francis Cunninghamの二人の演奏にアイリッシュ・ピアノの大御所で作曲家のCarl Hessionがコラボした形のアイリッシュ。収録曲40曲は

全曲アイリッシュの各ダンス･スタイルによるCarlの自作曲。普段､ケーリーバンドの演奏で聴くようなオーソドックスのダンス曲をEimearとFrancisが演奏すれば､誰もが踊りたくなるような､凄く軽やかなダンス曲に変貌する。リズム楽器ハープの優雅な軽やかさとコンサーティーナの軽妙な軽やかさが混ざった感じだ。Carlはアクセント程度のピアノ伴奏するCarlは今が旬の二人に自身作曲のアイリッシュダンス曲を演奏して欲しかったのだろう。ちなみに2014年､EimearとFrancisはMarian Curtin{ﾌﾙｰﾄ}を加えたトリオでオールアイルランドのチャンピオンの座に着いている。2019作。Úrnua)

*PATSY MOLONEY:The Temple In The Glen B

(リムリック出身のフルート奏者で1977年にフルート部門のオールアイルランド･チャンピオンというPatsy Moloneyのファースト･ソロ･アルバム。Mary Corcoranのピアノ又はNoreen O'Donoghueのハープとの共演による本作は､とてもリラックスしていて､聴いていて小春日和な心地よさ。長年英国のバーミンガムを拠点に活動しているというPatsyのアイリッシュ･フルート音楽は､音楽的には西リムリックのスタイルにクレアとスライゴーの要素を混ぜたアイリッシュだが､アイリッシュを愛おしみ､楽しむ気持ちが音楽に表われていて､ずっと聴き流していたい気持ちになる。ピアノとハープの軽やかな音色も心地よい。2015作。Patsy Moloney)

*GATEHOUSE:Down The Moor A

(ゲール語と英語の両方でオールアールランド･チャンピオン･シンガーの歌姫Rachel Garveyを擁する二姫二太郎のアイリッシュ･グループ"Gatehouse"の二枚目。メムバーの残りはフルートのJohn Wynne､フィドルのJohn McEvoyそしてコンサーティーナとギターのJacinta McEvoy。それぞれがアイリッシュ･ミュージックの精髄を極めた彼らのアイリッシュは余裕のあるペースを維持して､オーソドックスに聞こえて､演奏は洗練されていて､絶妙で味わい深いし､ゲール語の唄二曲と英語の唄三曲で美声を披露するRachelのシンギングは､言葉にならないほど麗しい。余裕綽々の大横綱級アイリッシュだ。ゲスト:Alan Kelly,John Joe Kelly,Michael McCague,Conor & Paddy McEvoy。Matt MolloyとAltanのマレードが大絶賛。2019作。Gael-Linn)

*PAUL BRENNAN:Airs And Graces D

(副題"Irish Traditional Music & Song"。ロンドンを拠点にアイリッシュのみならず､アイリッシュの要素を取り込んだルネサンス音楽やロックや映画音楽{ハリーポッターと死の秘宝の結婚式の場面の音楽}まで幅広い活動をしてきたイリアンパイプス奏者でシンガーのPaul Brennanのアイリッシュを謳歌した集大成的二枚組。主に彼のバンド"Carrig"～Brendan McGlinchey{ﾌｨﾄﾞﾙ},Nigel Portman Smith{ﾍﾞｰｽ/Andwella,Magna Carta,Pentangle},Kev Boyle{ｷﾞﾀｰ,ｷｰﾎﾞｰﾄﾞ}～とによるアイリッシュは､Davy Spillane風なアイリッシュ･ロック的な優雅なサウンドを発散し､ヴォーカルはアイリッシュおやじ魂があって､身震いさせられる。やわなアイリッシュじゃない。アイリッシュ魂も音楽もぶっとい。全59曲の34ﾄﾗｯｸ。2019作。Carrig Music)

*WE BANJO 3:Roots To Rise Live C

(Enda & Fergal Scahill兄弟とMartin & David Howley兄弟の四太郎の"We Banjo 3"の新作は米国ミシガン州でのライヴ。何だ､

この盛り上がりは！バンジョー、フィドル、マンドリン、ギター、バウロン等による音楽は見事にアイリッシュとブルーグラスやオールドタイム・ミュージックとのモザイク音楽をエネルギッシュに生み出していて、圧巻。David Howley のヴォーカルは米国フォーク～ブルーグラス色がにじみ出ているから、アイリッシュ・ファンのみならず、米国のカントリーやフォーク・ファンの感性をくすぐるだろう。米国ルーツ音楽の目線で聴くと、ご先祖の音楽と一体化した音楽として、超魅力的に聞こえてくる。前作"Haven"は RTE Radio 1 の"Folk Album of 2018"賞を受賞。2019 作。We Banjo 3)

*LYNNSEY WEISSENBERGER & TREASA HARKIN:DYAD C
(ダブリンの ITMA{ｱｲﾘｯｼｭ･ﾄﾗﾃﾞｨｼｮﾅﾙ･ﾐｭｰｼﾞｯｸ･ｱｰｶｲﾌﾞ}に勤務する Lynnsey Weissenberger{ﾌｨﾄﾞﾙ}と Treasa Harkin{ｱｺ}の共演盤。録音場所も ITMA のスタジオ。公的なコレクションの中から、これまでにレコーディングされたことのない曲などをフィドルとボタン・アコーディオンのコラボで演奏したものだが、それぞれの楽器の音色がクリアーな上に、ハーモニーを意識したバランスの取れた演奏は爽快で気分をリフレッシュしてくれる。モーニング・ティーに合いそうな爽やかアイリッシュだ。全 13 トラックの全 33 曲。2019 作。Lynnsey & Treasa)

*CHERISH THE LADIES:Heart Of The Home A
(Nollaig Casey{ﾌｨﾄﾞﾙ}が準メムバーとして参加の Cherish の本作は、アイリッシュ・シンガーの Kate Purcell にオールアイルランド・チャンピオン・シンガーの Molly O'Riardan のほか Nathan Carter、Don Stiffe、Ennis Sisters などをゲスト・シンガーに迎えて、まるで音楽を通して涙あり、笑いありのライヴ・ショーを観ているような、あの手この手で、様々なアイリッシュ・ミュージックを楽しませる。ゲスト:Donnchadgh Gough{Danú},Trevor Hutchinson {Lúnasa}。2018 作。Cherish The Ladies)

*ORAN BAGRAIDH:Oran Bagraidh C
(ゲール語の文化を持つスコットランドとアイルランドとウエールズのシンガーによる質の高いトラッド・アルバム。彼らは一週間、スコットランドのギャロウェイで交流をし、その成果が本作だが、ゲール語の唄を中心にした唄は、それぞれに個性的で精神性が高く、神秘的で格調が高い。各曲の素晴らしさから交流会の充実度が推し量れる。スコットランドから Josie Duncan, MacGillivray、アイルランドから Lorcán Mac Mathúna,Doimnic Mac Giolla Bhríde、ウエールズから Gwyneth Glyn,Bragod{二人組}等が素晴らしいシンギングを披露する。並の交流アルバムではない。2019 作。Oran Bagraidh)

*JOHNNY ÓG CONNOLLY:Fear Inis Bearachain C
(コネマラの Inis Bearachain 島出身の"King Of The Melodeon"と呼ばれた Johnny Connolly の息子で同じくメローディオン奏者の Johnny Óg Connolly のソロ。100 年前から受け継がれているアイリッシュ・ダンス音楽の基本演奏を聴くかのような安心感の感じられる大樹のような音楽。2018 作。Cló Iar-Chonnacht)

*JOHNNY ÓG CONNOLLY:Aisling Yoshua(Joshua's Dream) C
(Johnny Connolly の息子の Johnny の 2011 年のアルバム。いやはやノリに乗ってる。清々しく若々しい。メチャ最高。w.Brian McGrath ,Mick Conneely,Garry Ó Briain,Frank Kilkelly,James

Blennerhasset そして Jonny Connolly。2011 作。Og Music)

*SEAN RYAN:Sean Ryan ¥2890

(副題"A Collection Of His OwnCompositions & His Versions Of Well Known Traditional Tunes"。デジタル･リマスターによる二枚組ＣＤ。Seán Ryan & PJ Maloney の演奏を聴いたあとに本作を聴いたら面白い。当たり前のことかも知れないが、一瞬同じ音源!?と思ってしまうくらい二人の演奏から Sean のフィドルを取り出したかのような音楽。演奏スタイルも音色も変わらない。収録年は 1959 年から 1982 年まで。Joe Burke はブックレットに「本作は彼が伝統的フィドル･ミュージックに育んだ美しさの実例」と書いているが、アイリッシュのダンスのリズムがふんだんだが、清く美しく聞こえる。解説書{ブックレット}付。全 51 トラック。SeanRyan1)

*GRAINNE HOLLAND:Corcra C

(ベルファスト出身の女性アイリッシュ･シンガーの Gráinne Holland の新作で三枚目。全曲自作曲で大半の曲がゲール語の歌詞。プロデューサーを Flook の Brian Finnegan に迎え、Sean Og Graham,John Joe Kelly,Liam Bradley,Aidan O'Rourke,Cormac MacCarthy,Niamh Dunne 他の敏腕アイリッシュ＆スコティッシュ･ミュージシャン達の強力演奏のもと制作された本作は、Flook 風アイリッシュのそよ吹く風サウンドに乗ってシンギングする Grainne の唄は、ゲール語の唄でありながらも、Mary Black がうたうアイリッシュ･ソングのような輝きと親しみが感じられ、言葉の壁を超えて心に響く。2019 作。Grainne Holland)

*BACKWEST:Heritage Hall C

(ゴールウェイを拠点に活動する Backwest～Maureen{ﾌｨﾄﾞﾙ､ｳﾞｫｰｶﾙ} & Brendan{ｱｺ} Browne 兄妹に Fabian Joyce{ｷﾞﾀｰ､ｳﾞｫｰｶﾙ､ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ}と Lord Of The Dance の Peter Vickers{ﾊﾞｳﾛﾝ他}～の新作。Maureen & Brendan 兄妹によるフィドルとアコのコラボを音楽のコアにして、ギターとバウロンが共演＆競演＆饗宴する仕掛けのアイリッシュだが、兄妹のフィドルとアコの変幻自在なジャンプ力ある演奏は神業レベルで、二人の阿吽のコラボを聴いているだけで、身体が熱くなってくる。おまけに Fabian Joyce のシンギングは心にグサっ。百戦錬磨の貫禄のアイリッシュ。2018 作。Backwest Music)

*LIZ CARROLL･JAKE CHARRON:Half Day Road B

(Liz Carroll の新作はカナダのケルティック･トリオの East Pointers{2017 年 Juno 賞受賞}のメムバーで、ギター＆ピアノ奏者の Jake Charron。これぞ Liz Carroll！と声を上げてしまう気力に充ちた絶品のアイリッシュ･フィドル。本作はギターでもピアノでもアイリッシュが弾ける新進気鋭のミュージシャンとのコラボ。Liz のアイリッシュはさらにレベルアップ。ゲスト:Joannie Madden。2019 作。Liz Carroll and Jake Charron)

*STRING SISTERS:Between Wind And Water B

(Mairéad Ní Mhaonaigh{Altan},Liz Carroll,Liz Knowles, Catriona Macdonald{Blazin' Fiddles},Annbjørg Lien,Emma Härdelin{Garmana,Triakel}のアイルランド、北米、スコットランド、北欧のトラッド･シーンを代表するフィドル･グループ"String Sisters"の二枚目。w.Tore Bruvoll, Dave Milligan,James Mackintosh,Conrad Molleson。2018 作。String Sisters)

*STRING SISTERS:Live(一枚目。2007 作。Heilo)　B
*EILEEN GANNON:The Glory Days Are Over　B
(アイリッシュハープ奏者 Eileen Gannon の本作は、余計な飾りっ気のないすっぴんのアイリッシュハープ・ソロ。アイルランドの「フラキョー」をはじめ数々のハープ・コンテストで賞を受賞という彼女のハープ演奏は、いやはや生真面目というか、精緻というか、魔法の指と思ってしまうくらい、様々な、どんなリズムのアイリッシュ・ダンス曲をも見事に弾きこなす。最高レベルの模範演奏。音楽そのものも新鮮だが、ほとんどの曲があまり馴染みのない曲ということも耳に新鮮。13 トラックの 24 曲。2018 作。Eileen Gannon)
*BY HECK:A Toast To The 1920's　C
(1911 年にニューヨークに移住し、米国でのアイリッシュ・ミュージック黄金期の先導役を果たした Mick,Joe&Louis の Flanagan 兄弟の初録音が 1921 年。本作は By Heck～Frankie Gavin{ﾌｨﾄﾞﾙ},Martin Murray{ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ},Emma Corbett{ﾒﾛｰﾃﾞｨｵﾝ},Carl Hession{ﾋﾟｱﾉ}～を名乗るアイリッシュの三人のツワモノ達＋Flanagan 兄弟の故郷出身の女性メローディオン奏者の一姫三太郎が Flanagan 兄弟に捧げたアルバム。Flanagan 兄弟の音楽自体が大衆受けするノリ抜群のアイリッシュだが、彼らは兄弟達のレトロだが、ビンビン躍動するアイリッシュのスタイルをベースにしつつ、超絶な演奏で音楽をブラッシュアップする。メチャ凄い。2018 作。By Heck)
*ALEC FINN:Blue Shamrock　A
(デ・ダナンの創設メムバーの Alec Finn の 1994 年のソロ・アルバム。"Irish Airs Played on Guitar and Bouzouki"という副題そのままのブズーキとギターによるアイリッシュのエアー曲集で、厳かで気品ある珠玉の演奏の数々は、追悼の曲のような印象で、涙を誘う。共演者は Sean Ryan,Mary Bergin,Tommy Keane,Clare O"Donaghue,Dearbhaill Standun,Garvan Gallagher,Andrew Boland。1994 年。Alec Finn)
*THE GLOAMING:3　C
(シャンノース・シンガーの Iarla Ó Lionáird に Martin Hayes, Dennis Cahill,Caoimhín Ó Raghallaigh のアイリッシュ勢にアメリカ人ピアニストの Thomas Bartlett の五人組 Gloaming の三枚目。基本的に前二作の延長線上の Martin Hayes & Dennis Cahill のアイリッシュと Iarla の優美なシャーンノース・シンギングを素材に伝統的アイリッシュの桃源郷的心地よさをメムバーの一員で異色の若手プロデューサーの Thomas Bartlett が追求し、創作したある意味究極の美しいアイリッシュ。Martin & Dennis の演奏は普段通り。2019 作。Real World)
*HENSHAW FAMLY & FRIENDS WITH SPECIAL GUEST
:The Secret Sessions　C
(Sharon Shannon がアイルランドのラグビー・チーム「レンスター」の人気選手ロビー・ヘンショウと彼の家族＆友人と行った特別なセッション・アルバム。ヘンショウー家はアスローン{ダブリンとゴールウェイのほぼ中間にある町}の伝統音楽を長年にわたって演奏している家系で、ロビー・ヘンショウの祖父のビリーはバンド活動をしていたという。全曲で Sharon Shannon がセッションに参加し、開放的で和気あいあいとしたセッションの雰囲気を保ちつつ、大半の曲で先頭に立つ演奏で、旋風を巻き起こしている。アイリッシュの底力。本作の売上げはアスローンの South

Westmeath Hospice に寄付されることになっている。2018 作。Ceol Music)

*KAREN TWEED & TOM McELVOGUE:Luckpenny C

(アコの Karen Tweed とアイリッシュ・フルートの Tom McElvogue のデュオ・アルバム。二人で本作を作ろうと思い立ったとき、二人の友人の Paul Ruane{1967-2016}は闘病中だったという。本作は結果的にその亡き友人に捧げるアルバムになったのだが、Karen のアルバムとしては、久しぶりに「アイリッシュ」した音楽。それも若い頃に演奏するのが楽しくて演奏していた頃の初心に帰った無心のアイリッシュ。2017 作。TMc Productions)

*HANNAH FLOWERS:Amhran Na Cruite C

(米国ミネソタ出身のゲーリック・シンガーでハープ奏者のデビュー作。全曲ハープの弾き語りによるゲーリック・ソング集。彼女のアイルランドの伝統歌へのアプローチは、音楽性もそうだが、カナダの Loreena McKennitt がケルト音楽に向かう姿勢に似ている。Hannah はゲーリック・ソングの持つ不思議さや優美な響きをガラス細工のような美しく輝きのあるシンギングで引き立たせ、輝かせる。「シンギング・ウィズ・ハープ」の弾き語りの素朴さが音楽の純粋さと質とを高めている。ゲスト:Dáithí Sproule{ｷﾞﾀｰ},Cory Froehlich{ﾌﾙｰﾄ､ﾎｲｯｽﾙ},Danielle Enblom{ﾌｨﾄﾞﾙ､ﾀﾞﾝｽ}。ケルティックな夢見心地保証。全 12 曲。2018 作。Hannah Flowers)

*CIORRAS:Silver Lining A

(アイルランドのテレビ局 TG4 の Donal Lunny の番組で結成された七人組アイリッシュ・トラッド。グループ"Ciorras"の爽快デビュー作。楽器編成はフィドル、、コンサーティーナ、各種フルート{ﾌﾙｰﾄ奏者三名。ｺﾝｻｰﾃｨｰﾅ奏者とﾊﾟｲﾌﾟ奏者がﾌﾙｰﾄも演奏}、イリアン・パイプス、ホイッスル、ピアノ、パーカッション、バウロン、ギター、ベース、そして紅一点 Ciara Cunningham 嬢の魅惑のヴォーカル。全て調和が取れて、出来過ぎのデビュー作だった。2010 作。Wispy Cloud)

*BAIDIN FHEIDHLIMI - Gael Linn Singles 1968-1980 A

(Johnstons,Sean O Se,Ro-og Breandan O Duill&Skara Brae,Triona Ni Dhomhnaill,Maighread Ni Dhomhnaill,Michael O Domhnaill&Donal Lunny,Dermot O'Brien 他。Gael Linn の稀少音源からの全 20ﾄﾗｯｸ。2013 作。Gael Linn)

*AMELIA HOGAN:Transplants: From The Old To The New A

(Amelia Hogan はアイルランド系米国人アイリッシュ・シンガー。凛としたシンギングは、70 年代の女性トラッド・シンガーをホーフツさせる見事さ。米国から珠玉のアイリッシュ・トラッド。2013 作。Amelia Hogan)

*SEODA CEOIL 1 & 2 A

(Gael Linn の 60 周年記念で発売された 1960 年代後半のアイリッシュ・ミュージックの名演奏家の演奏集で二枚組 CD。"1"収録は、Willie Clancy,John Kelly,Sean O Conaire。"2"収録は、Seamus Ennis,Sean Keane,Seosamh O hEanai{Joe Heaney},John Joe Gannon。2013 作。Gael Linn)

*PADRAIGIN NI UALLACHAIN:Let The Fairies In B

(Len Graham の奥様 Padraigin の本作は、1994 年に発売された小さい子向け「子守歌」を中心にした名作"A Stor Is A Stoirin"の姉妹アルバム。Donovan の"HMS"の世界というか、これはもう夢の世界。

w.Donal O'Connor,Steve Cooney,Garry O Briain,Ronan Browne,
Tommy Hayes,Odhran O Casaide。全11曲。2012作。Ceoltai Eireann)

*KYLE CAREY:North Star A

(Seamus Eganをプロデュースに迎えて制作された米国人ＳＳＷの
Kyle Careyの本作は、自身のご先祖のアイルランド、スコットラン
ドそしてアパラチアのフォーク＆トラッドをご先祖に思いを馳せ
てスピリット高くうたって花開いたアルバム。共演者はLumiereの
Pauline Scanlon{約半分の曲で最高に美しい高音ﾊﾟｰﾄのﾊｰﾓﾆｰ･ｳﾞｫｰｶﾙ}、Solasの Eamon McElholm,Catriona McKay,Chris Stout,
Dirk Powell,Natalie Haas,James MacKintosh,Ben Walker,
Josienne Clarke,Gillebride MacIlleMhaoil。2014作。
Kyle Carey)

*CUIG:The Theory Of Chaos C

(2013年結成の五太郎の若きアイリッシュ･バンド"Cúig"の新作で
二枚目。メムバーは Miceal Mullen{ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ、ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ},Rónán
Stewart{ﾌｨﾄﾞﾙ、ｲﾘｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ、ヴｫｰｶﾙ},Ruairí Stewart{ｷﾞﾀｰ},Eoin
Murphy{ｱｺ}、Cathal Murphy{ﾄﾞﾗﾑｽ、ヴｫｰｶﾙ他}。Irish American
Newsで"Best New Irish Band 2016"に選ばれたという彼らの音楽
は、様々なタイプのアイリッシュのノリが重なり合ったチャレン
ジ精神旺盛なアイリッシュ･フォーク＆トラッド。同じタイプのバ
ンドはちょっと思いつかない。かと言って異色な感じがしないの
は、音楽そのものも、そして音楽する心もアイリッシュしているか
らだろう。音楽が若者らしく清々しい。2018作。Cúig)

*DAVID POWER & WILLIE KELLY:Apples in Winter A

(ヴェテラン･イリアンパイプス奏者がニューヨークを拠点に活動
するヴェテラン･アイリッシュ･フィドル奏者Wille Kellyと組ん
で発表した2016年のアルバム。二人ともそれぞれの楽器の特長を
活かした百戦錬磨の腕前の演奏と阿吽のコラボを繰り広げてい
て圧巻。2016作。DMP04)

[CD/ＵＳＡ{ﾄﾗｯﾄﾞ、ｱﾊﾟﾗﾁｱﾝ他}]

*PAPER WINGS:Clementine A

(Paper WingsはEmily Mann{ヴｫｰｶﾙ、ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ}とWilhelmina
Frankzerda{ヴｫｰｶﾙ、ｷﾞﾀｰ、ﾌｨﾄﾞﾙ}の若き女性デュオで本作は二枚
目。Emilyは The Crooked Jadesのツアーメムバーで Bruce Molsky
や John Herrmannの影響を受けたという。Wilhelminaは National
Twin Fiddle Championshipの優勝者でSSW。ギターとバンジョー
とフィドルを奏でてうたう Paper Wingsの音楽は歌唱法も音楽も
古き良き米国オールドタイム～アパラチア民謡スタイルのオリ
ジナル･ソング。現代っ子の二人はどっぷりと古き良き音楽の世
界に浸かって、凄腕の溌剌とした、そしてたまにとぼけた味のあ
る演奏で、自作の唄をオールドタイミーな風に乗せてシンギン
グする。古臭く聞こえもするが、音楽はギャルのフレッシュさに
満ちている。紙ジャケでラップ包装なし。2019作。Paper Wings)

*THE OTHER YEARS:The Other Years A

(The Other YearsはAnna Krippenstapelと Heather Summersの誕
生日が三日違いの女性二人組。Annaは SSWの Joan Shelleyのフィ
ドル奏者。二人ともにシンガーで、伴奏楽器はフィドルとバンジ
ョーとギター。彼女達の音楽は Jean Ritchieや Hazel Dickensを
思い出させるアパラチア民謡やオールドタイム･ミュージック。

2018 作。No Quarter)

*JEFF WARNER:Roam The Country Through B
(フォークソング収集家でフォーク･シンガーの Anne & Frank Warner 夫妻の息子 Jeff Warner のソロ。ギターやバンジョーやコンサーティーナを奏でながらうたう唄は、そのまま米国古謡の素朴な味わいに充ちていて、うっすら英国トラッドの世界へとつながる味わいの唄もある。それもその筈？Pete Coe の音楽パートナーで英国のトラッド･シンガーの Alice Jones が大半の曲でヴォーカル･ハーモニーとホイッスルなどの演奏で共演している。全 17 曲。WildGoose)

[CD/ＡＵＳＴＲＡＬＩＡ]

*LUKE PLUMB & KATE BURKE:Luke Plump & Kate Burke C
(元 Shooglenifty で、近年 Andy Irvine との共作"Precious Heroes"をリリースした Luke Plumb と Kate Burke & Ruth Hazleton の Kate Burke が組んで、滅茶苦茶素晴らしいフォーク/トラッド･アルバムを発表した。おそらく Andy との共作アルバムと同様、Luke が Kate のヴォーカルに惚れ込んでアルバム制作を持ちかけたのだろう。聴くともちろん"Crazy Man Michael"などの Kate の英国フォーク調のシンギングに惚れ惚れとしてしまうと同時に、Luke ってこんなに唄が上手かったの！と驚いてしまうほど、毅然としたシンギングに惚れ惚れとしてしまう。さらにずっと鳴り続ける Luke のマンドリンとブズーキの音色が気品があって気高く、二人のシンギングの味わいを鮮やかに浮き上がらせている。あくまで感覚的にだが Fotheringay のアコースティック版、あるいは Sandy Denny & Trevor Lucas 風のイメージを持った。w. John McCusker, Jarlath Henderson, 。2019 作。Kate Burke & Luke Plumb)

*SIMON BRADLEY & LUKE PLUMB:Wintering Out B
(スコティッシュ･フィドル奏者の S. Bradley と当時 Shooglenifty の L. Plumb のフィドルとブズーキのコラボ。スコティッシュ、アイリッシュそしてアストゥリアスの曲を初雪の新鮮さで清々しく演奏する。ヤッホーの快楽さ。2004 作。Shoogle)

*KATE BURKE & RUTH HAZLETON:Swapping Seasons A
(オーストラリアの女性ヴォーカル･デュオの三枚目。かつてのベストセラー。やや劣化。2002 作。Kate&Ruth)

*KATE BURKE & RUTH HAZLETON:Summer's Lonesome Tale A
(アイルランドと英国のフォーク＆トラッドと米国のオールドタイム･ミュージックがほどよくブレンドされた Kate&Ruth の四枚目。かつてのベストセラー。ゲスト:Andy Irvine, Bruce Molsky。2007 作。Tradsville)

[CD/ＦＩＮＬＡＮＤ]



(Tuuletar)

*TUULETAR:Rajatila/Borderline B
（フィンランドの四人組女性アカペラ･グループ"Tuuletar"{風の女神の意}の新作で二枚目。ヴァルティナのようなフィンランドの女性ヴォーカル･グループのヴォーカル･スタイルをベースにブルガリアン･ヴォイスなどの合唱の要素を混ぜて、フィンランド発の魅惑のアカペラ･ミュージックを創作する。曲目は伝統歌と自作曲の混成だが、古謡の影響を強く受けたという音楽は、超フォーク的で音楽が深い。リラ奏者とアコ奏者参加の二曲以外の伴奏は、全曲ビートボックスとパーカッションのみ。この二つの楽器から打ち出される豊かなリズムが何とも神秘的で、まるでフィンランドの古謡の世界へと誘われる感覚に襲われる。ワールド･クラスの先進的女性合唱の世界だ。伝統は受け継がれ、進化する。2019 作。Nordic Notes）
*AALLOTAR:Ameriikan Laulu B
（Aallotar はフィンランド系米国人のシンガーでフィドラーの Sara Pajunen とフィンランド人のシンガーでアコ奏者の女性二人組。二人のシンギングも演奏もフィンランド民謡の侘び寂びの心や心髄とも呼びたいものが息づいていて、感動的。2018 作。Nordic Notes）
*ARTO JARVELA & KAIVAMA:Arto Jarvela & Kaivama A
（Arto{ﾌｨﾄﾞﾙ、ﾆｯｹﾙﾊﾙﾊﾟ}と Kaivama{Sara Pajunen＝ﾌｨﾄﾞﾙ&Jonathan Rundman＝ｷﾞﾀｰ、ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ、ﾋﾟｱﾉ}との共演盤。フィドル二台、又はフィドルとニッケルハルパをフィーチャーしたサウンドは、屋外で気持ちよくライヴ演奏しているような自然な抑揚のある音楽で気持が良い。2012 作。Salt Lady Music）

[CD/ＮＯＲＷＡＹ]

*SVARTEVJA:Svartevja B
（屈指の女性トラッド･シンガーの Camilla Granlien がヴォーカルの三姫一太郎の北欧トラッド･グループ"Svartevja"のデビュー作。ノルウェー中央部のガウスダール地方とリレハンメル地方のトラッドで、Camilla{ｳﾞｫｰｶﾙ、ｺﾝﾄﾗﾊﾞｽ}以外の Johannes Selvaag, Nina Fjeldet, Mari Skeie Ljones の三名はハルディングフェーレ奏者。どれもこれも伝統的なノルウェーのトラッドの香り高い演奏で、北欧の空高く響くような音楽は、野原で生演奏を聴く気分。滅茶苦茶気持ちの良いノルウェーのトラッドだ。2018 年。Ta:lik）
*KIRSTI BAKKEN KRISTIANSEN:Linden B
（子ども時代を Gjøvik{イェービク}という町で過ごしたという Kirsti Bakken Kristiansen による清く美しいトラッド･シンギング･アルバムだ。地方の民謡収集家の Agmund Hole が 1930 年に刊行したコレクションには Kirsti の故郷の Gjøvik と Vardal の民謡が多く含まれていて、Kirsti 自身「これらの唄を唯一の楽器は自分の声のみ、完全一人で本来うたわれたようにうたうことを選んだ」と語っているように、本作は A.Hole のコレクションから主に Vardal の民謡を北欧トラッド独特の、天空に響き渡るような凛とした節回しで、完全無伴奏でシンギングしたもの。珠玉の全 17 曲。録音はオスロの教会。2019 作。NORCD）

[CD/ＥＳＴＯＮＩＡ]



(Leana & Hartwin)

*LEANA & HARTWIN:Kodu B

(何と素敵な音楽だろう。エストニアが領有するバルト海の島サーレマー島の出身で育ちの女性シンガーでバグパイプと木製フルート奏者の Leana Vapper-Dhoore とベルギーの Trio Dhoore のメムバーでアコ奏者の Hartwin Dhoore の男女の二人組による本作は、サーレマー島の静かで古代の森の空気が体感できる魔法的な自然環境の中から生まれた Leana の唄をフィーチャーした滅茶苦茶心地よいフランダースのトラッド風フォーク。なぜフランダースか。それは Leana のご主人で相方の Hartwin Dhoore の音楽性が色濃く、しかし音楽はとても優しい音色で、例えば、フランダースの Naragonia 風の音楽と肌に心地よい爽風{海風?}感のある Leana の心地な唄が合流したような音楽。もう奇跡としか言いようのない音楽。Leana のフルートは Michael McGoldrick ぽっかたりもする。2019 作。Trad)

*TRIO DHOORE:Madus Operandi B

(Koen{ｱｺｰｽﾃｨｯｸ&ｴﾚｷ･ﾊｰﾃﾞｨｰ･ｶﾞｰﾃﾞｨｰ},Hartwin{ｱｺ、ﾎｲｯｽﾙ、ﾊﾞｸﾞﾊﾟｲﾌﾟ}&Ward Dhoore{ｷﾞﾀｰ、ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ}の三兄弟による心うきうきなデビュー作。ハーディーガーディー、アコ、バグパイプを要にした楽器編成とフランス中央部のダンス音楽をベースにした音楽性は、Blowzabella と重なる。三兄弟は小編成を活かして、リズムが自由で遊び感覚とおしゃれっぽさがある。聞き流していて、気持ちが良い。2013 作。Appel)

*MAARJA NUUT:Une Meeles B

(Maarja 嬢はエストニアの神話や伝説そして 20 世紀初めのフィールドレコーディングなどを研究し、唯一無比の優れたエストニアのトラッドを創作する。彼女のシンギングとフィドルの演奏は伝統に強く根ざしながらも、いにしえのエストニアに誘われるような夢幻性を帯びていて、先鋭性と孤高感が感じられるもの。全てが秀逸。2016 作。Maarja Nuut)

[CD/BELGIUM,FLANDERS]



(Shantalla)

*SHANTALLA:From The East Unto The West B

(結成は 1997 年。ベルギーを拠点に活動する Helen Flaherty{ｳﾞｫｰ

ｶﾙ､ﾊﾞｳﾛﾝ},Kieran Fahy{ﾌｨﾄﾞﾙ},Joe Hennon{ｷﾞﾀｰ､ｳﾞｫｰｶﾙ},
Gerry Murray{ｱｺ､ﾌﾞｽﾞｰｷ他},Michael Horgan{ｲﾘｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ､ﾌﾙｰﾄ､
ﾎｲｯｽﾙ},Simon Donnelly{ｷﾞﾀｰ､ﾌﾞｽﾞｰｷ､ｳﾞｫｰｶﾙ}の一姫五太郎から
成るアイリッシュ＆スコティッシュ混成のケルティック･バンド
の新作で四枚目。アイリッシュとスコティッシュを中心にした選
曲で､アイリッシュ･スタイルの音楽にヨーロッパ的な優美さや
哀愁を加味した彼ら独特なケルティック･ミュージックを創作す
る。スコットランド人シンガーの Helen Flaherty のシンギングを
含めた音楽全てが堂々として味わい深い。2019 作。Appel)

*SHANTALLA:Shantalla A
(Helen Flaherty{ｳﾞｫｰｶﾙ､ﾊﾞｳﾛﾝ},Kieran Fahy{ﾌｨﾄﾞﾙ},Joe
Hennon{ｷﾞﾀｰ},Gerry Murray{ｱｺ､ﾌﾞｽﾞｰｷ他},Michael Horgan{ｲﾘ
ｱﾝﾊﾟｲﾌﾟｽ､ﾌﾙｰﾄ､ﾎｲｯｽﾙ}の一姫四太郎から成る､デビュー作から
トップ･ケルティック･バンドの躍り出た Shantalla ののデビュ
ー作。2000 作。Wild Boar Music)

*TRIO DHOORE:Madus Operandi B
(Koen{ｱｺｰｽﾃｨｯｸ&ｴﾚｷ･ﾊｰﾃﾞｨｰ･ｶﾞｰﾃﾞｨｰ},Hartwin{ｱｺ､ﾎｲｯｽﾙ､ﾊﾞｸﾞﾊﾟ
ｲﾌﾟ}&Ward Dhoore{ｷﾞﾀｰ､ﾏﾝﾄﾞﾘﾝ}の三兄弟による心うきうきなデ
ビュー作。ハーディーガーディー､アコ､バグパイプを要にした楽
器編成とフランス中央部のダンス音楽をベースにした音楽性は､
Blowzabella と重なる。三兄弟は小編成を活かして､リズムが自由
で遊び感覚とおしゃれっぽさがある。聞き流していて､気持ちが
良い。2013 作。Appel)

*MARC MALEMPRE･REMI DECKER:Codicille 2013 B
(副題"Chanson Populaire De Wallonie"。本作は､シンガーでフィ
ドル奏者の M.Malempre とシンガーでギター､コルヌミューズ奏者
の R.Decker の二人が､ベルギー南部のワロン地方の村々の伝承歌
に注目し､再現しようと作られたワロン地方のトラッド･アルバ
ム。の Marc のシンギングは､元 Malicorne の Gabriel Yacoub のシン
ギングを想起させる味わいを持ち､二人でハモる唄は Malicorne
風な気高さと土臭さを放っている。｢村々の伝承歌｣である本作は､
音楽の幅が広く､多様なトラッドで深く伝承歌の世界へと誘う。
2013 作。Home)

*THE HELEN FLAHERTY BAND:Gazing At The Moon B
(元 Shantalla のヴォーカルで屈指のスコットランド人トラッド･シ
ンガーの Helen Flaherty のケルティック･バンドのデビュー作。
Helen のシンギングと Philip Masure のギター＆シターンの妙技を
要に､フィドルとフルートがケルティックな芳香を添えるという音
楽創りが成されていて､Helen のたおやかなシンギングは､優艶で実
に味わい深い。タイトルではないが､｢お月見｣で夢うつつ気分。
2018 作。Appel)

[CD/ＳＰＡＩＮ]

*RUAILLE BUAILLE:Ru:le Bu:le C
(英国人シンガーの Duncan Bennett がヴォーカルのスペインの五
人組ケルティック･バンド"Ruaille Buaille"の 2009 年作。アイリ
ッシュとスコティッシュを中心に､ガイタ､イリアンパイプス､ホ
イッスル､ブズーキ､ギター､マンドリン､フィドル､バウロンなど
の楽器を駆使し､アイルランドやスコットランドの大型バンドと
肩を並べるケルティック･ミュージックを堂々と体現する。Duncan

Bennett の唄心ある味わい深いシンギングは絶品で、特にトラッドの名曲"The Lakes Of Pontchartrain"は圧巻。ボーナス曲"The Lark In The Morning"を含めて全 10 曲。数に限りがあります。2009 作。Several）

[CD/ＡＳＴＵＲＩＥＳ]



（Gatos Del Fornu）

*GATOS DEL FORNU:Nacat C

（黒猫がマスコットのスペインのアストゥリアスの 9 人編成のケルティック･バンド"Gatos Del Fornu"の 2008 年のアルバム。こんな凄いケルティック･バンドがいたことを忘れていた。バンド名で検索してもヒットしない。リード･ヴォーカルの Silvia Quesada で検索したら、一枚ソロを出しているようだ。音楽的には同じルト圏のガリシアのトラッド風だが、Silvia 嬢のシンギングを含めてケルティック･バンドとしてのレベルは世界クラスだ。数に限りがあります。2008 作。Fono Astur）

[CD/ＧＡＬＩＣＩＡ]

*CHOUTEIRA:Folla De Lata B

（ガリシアの歌姫 Uxia をヴォーカルに据えた異色のガリシアン･トラッド･バンドの Chouteira の 2000 年の三枚目。面白いのは、ガイタやパンデレイタやアコなどの馴染みの楽器に加えて、サックスやチューバやトランペットなどの管楽器が加わっていて、イングランドなら Brass Monkey のような音作りを加えていること。このサウンドは、ケルティックなガリシアン･トラッドに耳慣れたファンには目新しく響くが、ある意味むしろ南欧～地中海の民俗音楽的な響きでもあって、むしろ土俗性を増しているようにも感じられる。Uxia の孤高のシンギングも絶品。2000 作。Boa）

*NA LUA:As Fases De Na Lua B

（ガリシアを代表する歌姫 Uxia を擁したガリシアを代表するトラッド＆フォーク･ロック･バンド"Na Rua"の 20 周年記念アルバム。既発表音源からの全 18 曲。ガリシア独特なケルティック･サウンドは、今聴いても鮮烈。2001 作。Boa））

[CD/ＩＴＡＬＹ]

*BALARÙ:Gravure B

（Balarùは Francesco Cavallero{ﾊｰﾃﾞｨｶﾞｰﾃﾞｨ、ｳﾞｫｰｶﾙ}, Andrea Lopomo{ﾌﾞｽﾞｰｷ、ﾊﾞﾝｼﾞｮｰ、ｳﾞｫｰｶﾙ}, Ilario Olivetti{ｺﾙﾇﾐｭｰｽﾞ、ｸﾗﾘﾈｯﾄ、ﾌﾙｰﾄ他}, Andrea Beltrando{ｱｺ}の北イタリアはピエモンテの四人組トラッド･バンド。本作は、ピエモンテの伝統音楽の魅力に取り憑かれた若者四人が独自にリサーチして創作したピエモンテのトラッドで、彼らのトラッドは、各種楽器の演奏力と表現力が充実した上に、活き活きしていて瑞々しい。1980 年代、

La Ciapa Rusa を初めて聴いたときを思い出した。2018 作。
Felmay)
*RE NILIU:In A Cosmic Ear C
(1979 年結成のカラブリアのトラッド･バンド"Re Niliu"の 2015 年作。カラブリアの民俗音楽に根ざしつつ、音楽性はワールド･ミュージックのレベルで多様かつ華やかで、伝統楽器とロック･ユニットの混成はロックのエネルギーをも取り込んでいて、さらなる高みに達するカラブリアン･トラッドを体現している。「ルーツ回帰は夢を探検すること」の言葉は、彼らのピンポイントながら、多層的文化を持つカラブリアンの音楽を熱く魅力的な物に変幻させている。2015 作。Alfa Music)
*ROSAPAEDA:In Forma Di Rosa B
(南イタリアの歌姫 Rosapaeda の 2001 年のアルバム。彼女のアラブ＝地中海風味香るヴォーカルと敏腕演奏家達による汎南イタリア～汎地中海音楽的にスケールの大きな民俗色豊かな音楽。2001 作。Sottosuono)

[CD/ＨＵＮＧＡＲＹ]
*GEREBEN:The Argyelus Birdie C
(巷では数万円で取引されているというハンガリーの民俗音楽グループ"Gereben"の 1998 年作。メムバーはツィター奏者でヴォーカルで Muzsikás のメムバーでもあった Antal Rácz とフィドルとリュートの Rőmer Ottóとガルドンとダブルベース奏者の Péter Molnár のトリオ。彼らが目指す音楽はハンガリーのフォーク･ミュージックの楽器で最も古い民族楽器の一つのツィターをフィチャーしたハンガリーのフォーク･ミュージックの創作。ギターのようにかき鳴らされるツィターの響きはアラブ＝地中海音楽風味があって、ジプシー音楽のイメージを豊かにする。木訥としたヴォーカルも味がある。数に限りがあります。1998 作。Pan)
*MUZSIKAS･SEBESTYEN MARTA:Hazafele C
(英題"Homeard Bound"。1996 作。Gong)
*KORPAS EVA:Szerelem,Szerelem B
(英題"Love,Love"。Primas Parade,Tukros Band,Lakatos Robert などのアルバムで魅惑的なヴォーカルを披露している女性シンガーの Eva のソロ。本作は Eva のエキゾティックで不思議な安らぎ感があるジャズ風味のハンガリアン･トラッド。Muzsikas 系でも Makam 系でもな新感覚の魅惑のハンガリアン･トラッド。全 18 曲。2010 作。olkEuropa)
*ORFEO:Zeneszcsoport B
(Kolinda 結成前の Kolinda のメムバー達の貴重な音源集。Kolinda の諸作はデビュー時からロック･ファンにも衝撃を走らせた完成品以上の完成品だったが、本作では、Kolinda 前夜的完成音楽、ハンガリー伝統音楽等が聴ける。試行錯誤時代の Kolinda と Kolinda の姉妹グループの Vizonto の魂震わす演唱だ。全 22 曲。P62 のブックレット付。2011 作。KOKE-001)

[CD/KLEZMER,GYPSY,BALKAN 他]
*BRATSCH:Gypsy Music From The Heart Of Europe B
(1993 年に World Network のフォーク･ミュージックのシリーズの"France"で発売された本作。五人編成のジプシー･グループの

Bratsch はルーマニアやハンガリーの伝統的な音楽の楽器編成に従って、パーカッションのない楽器編成で、中央ヨーロッパのジプシー音楽に焦点を当てて、ジプシー・グループがそうであったように様々な音楽性をミックスしたジプシー音楽を創作する。アラブの香りさえする彼らのジプシー音楽は味わいが深く、奥が深い。時を超えて感動的。詳細解説付。1993 年。Network)

*DEN FLYGANDE BOKRULLEN:Shuff! B
(スウェーデンの６人編成のクレズマー・バンドの３枚目。「クレズマーのパンク・ロッカー」と言われる彼等のクレズマーは、ホーン３台とサックス＆クラリネット{同じ奏者}が１台の４台の吹奏楽器が炸裂するまるでバルカン・ビート・バンドのような祝祭ムード満点なクレズマ。世界で最もハッピーなｸクレズマー・バンドかも。2007 作。Arko)

*OLD SALT:Up River Overseas A
(Old Salt は米国人一名、スコットランド人一名、ベルギー人三名、スウェーデン人一名で二姫四太郎の六人組。核になる音楽は米国人シンガーでバンジョーとフィドル担当の Dan Wall の音楽性、それはアパラチアン音楽とオールドタイム・ミュージック。Dan Wall 自身がその系統のシンガーとして、ミュージシャンとして秀でた才能の持ち主で、他国の音楽仲間の手を借りて、その系統の音楽の最前線のハイブリッドな音楽を創作していて、お見事。ヨーロッパの古風なジプシー音楽のサウンドもご披露。2016 作。Appel)

*GIRO:Galway International Retro Orchestra C
(アイルランドのゴールウェイで結成された一姫三太郎の四人組。彼らが目指す音楽は 20 世紀はじめ頃の雰囲気の音楽。アイリッシュもジプシーもクレズマーも北欧も「20 世紀はじめ頃の雰囲気」をそれ風のレトロなサウンドで創作していて、ユニークだし、全体を通して、音楽に人情味が感じられて、心はずっと笑顔。2014 作。GIRO)

[CD/ＧＥＯＲＧＩＡ]

*GEORGIAN FOLK SONGS A
(グルジアのフォーク・ソング集。全 17 曲。1994 作。Sound Of The World)

[CD/ＬＥＢＡＮＯＮ]

*FARID ELATRACHE:Farid Eltrache(1990 作。Voice Of Lebanon)A
*FARID ELATRACHE:The Best Of Farid El Atrache A
(ライヴ。1990 作。Voice Of Lebanon)

[CD/ＭＯＲＯＣＣＯ]

*HASSAN ERRAJI & ARABESQUE:Nikriz(1989 作。Riverboat) B
*HASSAN ERRAJI & ARABESQUE:In Dounia(1990 作。Riverboat) B

[CD/ＵＧＡＮＤＡ]

*THE KAMPALA SOUND B
(副題"1960s Ugandan Dance Music"。1988 作。Original Music)

---

*今回のカタログは 9 月 13 日をメドに発行する予定で進めていたの

ですが、新カタログで販売を予定していた商品の仕入れがスムーズに行かず、5 日遅れての発行になりました。その 5 日遅れの間に新たにおいしい新譜情報が飛び込んできて、カタログ紙版のラストページを飾ることになりました。特に Kevin Burke の新譜は楽しみです。
*今回気まぐれで棚に残っていたスペインの Bualille Buaille の 2009 年作と Gatos Del Forne の 2008 年作を聴いてみたら、ほんの 10 年前にこれほど圧巻のケルティックな音楽を体現していたバンドがいたことを改めて知って、驚いてしまいました。これらの CD を配給していた会社の新譜情報は、ケルト系バンドやシンガーの新譜情報はほとんど皆無になっています。彼らのようなスペイン北部のケルト志向のバンドは今どうしてるんでしょうかね。
*夏の思い出を一つ。前回のカタログで「Movie&Music 真夏の昼の夢」という早弥香が出演する催しのご案内をしましたが、蝉がうるさく鳴く森の中のホールで行われた催しは、音楽も映画も人との出会いも楽しいものでした。観客の中にタムボリンの開店当初からのお客さんも来てくれていました。当時大学生だったＭさんも今は、定年退職をして、悠々自適の生活をしているということでした。Ｍさんから「40 周年に何もされなかったですね」と。自分の中では勝手に「神宿る沖ノ島」を刊行することを「40 周年記念」と決めていました。Ｍさんから「タムボリン 50 周年記念には何かして下さいね」とお願いされました。8 年後、是非そうしたいと思っています。
*湯布院の韓国人観光客は見事に激減してしまっています。政治問題が即、これほど影響を及ぼすとは･･･。
*千葉県にお住まいの皆さま、台風 15 号の被害はありませんでしたか？ニュースを見て、被害の甚大さに驚いています。
*初めにも書きましたが、消費税率変更に伴い、当店では１０月６日受付分より１０％課税となります。計算を間違えないようにしなくっちゃ。
*では、秋の夜長に楽しむ CD のご注文をお待ちしています。(船津)

●堀田はりいと猫サリーのブログより
https://ameblo.jp/toyuden/entry-12527221619.html
9 月 13 日(金)、大分市佐賀関にある関崎海星館という天文台で（生山）早弥香のお月見コンサートが開かれたので、何でも係りで同行しました。
会場から海を眺めたら、ビックリ！何と、四国の佐田岬がすぐそこに！



大分から見た四国の愛媛の佐田岬



左側の島のように見えるのは四国の佐田岬